

332-13

獸醫學士 生駒藤太郎 校閱
獸醫 渡邊閑一郎 纂著

家畜治療寶典全

明治
43.12.10
丙交

東京

有隣堂發行

自序

國家の進歩に伴ひ畜産事業の改良發達は近時大に歩武を進め衣食住の變遷と軍備の擴張は家畜の改良蕃殖を促し農業及交通機關の進歩發達は動物力の利用を増進せしめ依て以て畜産經濟の整理を計るの時期に際會せり此の時に當りて家畜飼養者たるもの益々家畜の改良蕃殖を圖り以て畜産經濟の整理と國利民福の増進とを期待せんと欲せば須らく適當の飼養管理を行ひ常に家畜の健康を計らざるべからず若し不幸にして一朝家畜の疾病に陥る

ことあらんか宜く合理的の療法を施し以て病畜を死地より救ふべく又平素力とめて疾病を未發に防がざるべからず然るに飼養者の多くは徒らに之れを看過し治療の時期を誤り或は時に祖先傳來の遺法を施し或は迷信の結果神佛に祈願し改善の法を究むるなくして救ふべきを救ふ能はず癒ゆべきを癒す能はず空しく致死癡用の不幸を招き畜産經濟に不利の影響を及ぼすこと蓋し少々にあらざるなり是れ畢竟家畜飼養者の家畜疾病の何たるを理解せざるに基くものなり故に家畜疾病の概要と之れ

が治療法とを知らしむるは目下の急務なりとす是れ余が淺學無能をも顧みず本書を公にする所以にして實地家之れに因りて裨益する所あらば編者の幸焉れに過ぎざるなり

明治四十三年八月中旬

纂著者識

例言

一本書は家畜飼養者の爲めに家畜疾病の概要と之れが治療法とを知らしむる目的を以て編纂したるものなれば力めて平易簡單を旨とせり

一本書編纂の方法は章を十二章に分ち日常家畜に頻發する疾病の原因、症候、療法及び豫防法等を叙述せるものなり

一本書記載の藥品は總べて第三日本藥局法に據れり

一本書所載の溫度は攝氏、藥量は瓦系統による瓦量は何瓦と記さずして皆數字にて表はせり例へば百瓦を一〇〇〇、一デン瓦を〇・一と記すが如し

一人名及原諸名は總て片假名にて記載せり
 一本書の卷末には病畜一般の看護法、藥物の作用と用量、分量、オンス量、匙量、滴量、藥物の施用部、藥物と動物との關係、用藥の時期と回數其他數件を附記し以て讀者の參考となせり

家畜治療寶典 目次

第一章 消化器病

口内炎	一
耳下腺炎	三
咽頭炎	四
食道炎	七
牛の舐病又異嗜	八
食毛病	九
馬の急性胃腸加答兒	一〇
馬の慢性胃腸加答兒	一三
牛の急性胃腸加答兒	一五
牛の慢性胃腸加答兒	一七
牛の急性鼓腸	一八
反芻獸の第一胃食滯	二〇
幼獸の胃腸加答兒	二一

創傷性胃横隔膜炎.....	二三
馬の疝痛.....	二四
牛の疝痛.....	二八
豚の疝痛.....	二九
羊及山羊の疝痛.....	三〇
犬の疝痛.....	三〇
胃腸炎.....	三一
黄胆.....	三四
肝臓實質炎.....	三六
腹膜炎.....	三七
腹水.....	三九
第二章呼吸器病	
鼻加答兒.....	四一
急性喉頭加答兒.....	四二
慢性喉頭加答兒.....	四四
慢性喉頭加答兒.....	四五

格魯布性喉頭炎.....	四六
喘鳴症一名喉頭偏癰.....	四七
急性氣管支加答兒.....	四八
慢性氣管支加答兒.....	五〇
肺充血.....	五一
肺出血一名咯血.....	五三
肺炎.....	五四
馬の格魯布性肺炎.....	五四
牛の格魯布性肺炎.....	五五
加答兒性肺炎.....	五六
異物性肺炎.....	五九
肺氣腫.....	六〇
息癆.....	六一
肋膜炎.....	六四
胸水.....	六五

第三章循環器病

心臓の肥大及擴張……………六六
 ○牛の心嚢炎、創傷性の心嚢炎及心臓炎……………六八
 馬及他家畜の心嚢炎……………六九
 心筋炎……………七〇
 急性心内膜炎……………七一
 慢性心内膜炎……………七二

第四章泌尿器病

腎充血……………七四
 急性腎炎……………七六
 慢性腎炎……………七八
 尿閉……………七九
 膀胱加答兒……………八〇
 反芻獸の血色素尿症……………八二

第五章生殖器病

包皮炎……………八四
 陰嚢の損傷及炎症……………八五
 陰嚢の水腫及血腫……………八六
 子宮炎……………八七
 膣炎……………八九
 膣脱……………九〇
 子宮脱……………九二
 産蓐麻痺又産蓐急癇……………九四
 娩随停留……………九八
 乳房炎……………一〇〇

第六章眼病

結膜炎……………一〇三
 膿漏性結膜炎又化膿性結膜炎……………一〇四

第七章 運動器病

- 角膜炎 一〇六
- 角膜潰瘍 一〇七
- 角膜炎 一〇九
- 月盲又 周期性(間歇性)眼炎 一一〇
- 筋肉 痲痺質斯 一一二
- 關節 痲痺質斯 一一五
- 骨軟症 一一七
- 佝僂病 一二〇
- 腱炎及 腱鞘炎 一二二
- 肩胛關節 挫傷及 轉振 一二四
- 肩胛關節炎 一二五
- 肩跛行 一二五
- 肘關節炎 一二七
- 肘腫 一二八

第八章 蹄病

- 冠膝 一三九
- 管骨瘤 一三〇
- 指關節の 轉振 一三二
- 種子骨跛行 一三三
- 舩囊炎 一三四
- 躡跛行 一三六
- 飛節内腫 一三七
- 飛節外腫 一三八
- 飛節後腫 一三九
- 鞍傷 一四〇
- 蹄血斑 一四二
- 釘傷 一四三
- 踏創 一四五
- 蹄冠躡傷 一四六

蹄軟骨癭……………一四七

蹄球炎……………一五〇

蹄葉炎……………一五一

蹄癩……………一五五

蹄叉腐爛……………一五七

第九章 神經病……………一五九

腦充血……………一五九

腦貧血……………一六一

腦卒中……………一六二

馬の腦膜炎……………一六三

慢性腦水腫一名神乏症……………一六六

日射病……………一六七

熱射病……………一六八

腦脊髓膜炎、項瘰一名ボルナ病……………一六九

第十章 體質病……………一七〇

第十一章 皮膚病

貧血病……………一七〇

惡性貧血……………一七一

羊の水血病……………一七二

牛の水血病……………一七三

失苟兒陪屈……………一七四

第十一章 皮膚病……………一七五

紅斑又紅斑性皮膚炎……………一七五

濕疹……………一七五

水斑、膝輝、飛輝……………一七七

顆粒性皮炎……………一七八

匍行疹……………一八〇

傳染性膿疱皮炎……………一八一

疥癬……………一八二

毛囊虫症……………一八四

第十一章 傳染病

牛疫	一八七
炭疽	一九〇
氣腫疽	一九二
鼻疽及皮疽	一九三
假性皮疽	一九六
肺疫	一九八
流行性鷄口瘡 一名口蹄疫	二〇〇
羊痘	二〇一
豚虎列拉	二〇二
豚羅斯疫	二〇四
狂犬病	二〇五
腺疫	二〇八
胸疫	二一〇

馬の流行性感胃	二一一
牛の流行性感胃	二一五
強直症	二一七
犬瘟熱	二二〇
幼獸赤痢又白痢	二二四
成獸赤痢	二二五
敗血病	二二六
膿毒症	二二八
血斑病	二二八
牛の惡性加答兒又頭病	二三〇
結核病	二三二
放線菌病	二三五
馬の媾疫	二三六
家禽虎列拉	二三七
家禽實扶埤里	二三八

附録

病畜一般の看護法 二四一

薬物の作用と用量 二四三

分量 二四五

瓦量 二四五

グラム量と本邦重量との比較 二四五

オンス量 二四六

本邦液量 二四七

匙量 二四八

滴量 二四九

薬物施用部 二五〇

(1) 胃内適用 二五〇

(2) 直腸用法 二五一

(3) 静脈内注射 二五二

(4) 皮下注射 二五三

(5) 蒸気吸入法 二五四

(6) 薫蒸法 二五四

(7) 局所用法 二五五

薬物と動物との関係 二五五

一 牝牡 二五六

二 特感性 二五六

三 不感性 二五七

四 疾病 二五七

五 薬品の性質 二五八

用薬の時期と回数 二五八

各家畜に於ける用薬の方法 二五九

製劑並に投薬施用法の概要 二六二

配合禁忌薬 二七一

獣醫藥室に常備すべき薬品 二七七

藥物溶解表……………二八二
 家畜の体温、脈搏、呼吸數……………二八六

家畜治療寶典目次終

家畜治療寶典

獸醫學士生駒藤太郎校閱

渡邊閑一郎纂著

第一章 消化器病

消化器病とは口腔、咽頭、食道、胃腸及び腹膜、肝臓等の疾病を指すものにして飼養管理の失宜即ち寒冷の胃觸、飼料過多變敗の食餌、濫度の勞働等に起因するものなり故に常に攝生に注意し適當の飼養管理を行ふべし

口内炎

原因 本症は外傷、粗硬の食、化學的刺戟物、多數の有毒植物

等の爲めに起り或は又熱湯、熱食の如き温熱にも起困することあり

徴候 此の病に罹れば咀嚼に當りて疼痛を訴へ口内粘膜は充血腫脹し舌面に灰白色の粘苔を生じ流涎泡沫を漏らして食欲減損するに至る

療法 原因を除去し屢々清水にて洗滌清潔ならしめ次の如き諸劑を適宜應用すべし即ち醋八分の一リットルにクロールナトリウム一食匙を加へたるものを清水五合餘に溶解して口内を洗滌し或はクロール酸カリウムの一乃至四％溶液又は二―三％の硼酸水を用ふ唾液の分泌盛んなるときはタンニン酸、明礬等の如き收斂薬を處すべし重症は粗硬の食を禁じ軟食又は流動滋養食を給し且つ動物の

緊留に注意すべし

耳下腺炎

原因 此の病は器械的損傷及び傳染毒により或は又近傍の疾病より蔓延す

徴候 初期にありては耳下腺部に散蔓性腫脹を生じ温熱疼痛を帯び後に至れば腺は硬固となり流涎、呼吸及嚥下困難となる腫脹若し自然に消散せざるときは膿瘍に變じ之れに觸るれば波動を呈するに至る

療法 耳下腺の炎症に對しては決して冷湯を用ふべからず温湿布又はブリースエッツ氏巻法局部に水又は石炭酸水にて湿めしたる布片を貼し其の上へを温包すを用ゐ樟

腦、クレオリン、石炭酸の軟膏を塗布して温包すべし頑固の症にありてはヨード丁幾又はカンタリヌ軟膏を塗擦し若し患部化膿するに至れば速かに切開し排膿後は5%クロール亜鉛水其他の消毒液を用ゐて患部を消毒し外科の通則に従ひて處置すべし

咽頭炎

原因 虚弱の動物、幼齡、愛寵過度は本症の素因となり寒胃、器械的、化學的、温熱的の直達刺戟并に附近の炎症、傳染病等は之れが誘因となるものなり

徴候 本病を發すれば食慾減損、痛咳を發し咽喉部を壓すれば知覺過敏にして疼痛を訴へ温熱腫脹し咀嚼嚥下共に

困難を來し唾液及び飲食物は間々鼻腔より漏出するに至る鼻粘膜は充血腫起し最初は粘液、後には膿様液を漏らし呼吸促進も喘鳴を發す咽喉部を聽診すればラツセル(囉音)を聽く體温多くは昇騰し攝氏四十度乃至四十一度に達し脈は一分時四十乃至四十八を算す結膜潮紅し通便遲滯するに至る

療法 此の病を治するには攝生法に注意すること尤も必要なり即ち病馬には滋養軟和の食を給し畜體を温包し舍内の溫度を保ち通氣を計り賊風の侵入を防ぎ臥藁は多量に入れ糞尿に汚れたる寝藁は長く置かずして除去し患畜の口腔、鼻腔は清水を以て屢々洗滌し天氣晴朗の日には舍外に出して暫時の引き運動を命ずべし

初期は水に浸したる布片を以て頸を巻き或はアムモニア擦劑、芥子精(5%)の如き刺戟藥を塗擦しクレオリン、テレピン油、石炭酸(各1%)を以て蒸氣吸入を行なふ大動物に對して蒸氣吸入を行なふ簡便なる方法は槽に煮沸せる藥水を盛り其の槽縁と鼻端の邊りとの間に布製の底なき袋様のものを張るにあり但し之れを行ふの際は終始看護して動物の湯傷をなさせらんことに注意せざるべからず又小動物に對しては人に應用する蒸氣吸入器にて可なり高熱に對しては冷水を灌腸し冷濕布を體軀に纏ひアンチピリン一五〇又はヂキタリス葉末一二〇を與へ咳嗽頻發すれば鎮咳劑例へばプロピウムカリウム七〇硝酸カリウム一二〇杏仁水一五〇阿片丁幾五〇水一〇〇を一日三回に與へ

嚥下困難なるものには甘汞一〇乃至二〇を白糖適宜に混ぜ舌上に撒布すべし其他消化不良には食慾催進劑を與へ便秘には硫酸ナトリウム、甘汞の如き緩下劑を處するにあ

食道炎

原因 時々咽頭炎に併發し異物の籍留、食道探子の誤用苛烈の藥品により或は又冷熱の飲食に基因することあり
徴候 此の病に罹れば嚥下困難を來して大に流涎し食慾あるも食すること能はず日を逐ふて瘦削するに至る
療法 患畜には清涼緩和の滋養食を給しタンニン酸、硝酸銀、クロール酸カリウムの如き收斂劑の内服を試み若し食

道狹窄の虞あるときは食道探子を應用すべし

牛の舐病又異嗜

原因 之れが原因は食物中石灰鹽類の不足、消化器の障害等に基くものゝ如し

徴候 此の病は冬季乳牛、孕牛、細農の牛に多發するものにして之れが症候は病初食慾、反芻、泌乳共に減少し倦怠疲勞し次で食慾全廢し異物を嗜好するに至る即ち糞泥に汚れたる藁を食し砂土、木片、檻糞、泥土、糞尿等を食し漫りに舐癖を發し衣服、欄柵、壁柱等を舐め眞の食を啖はず病勢増進すれば反芻微弱、胃の運動弱く或は全く欠如し糞は初め柔軟にして粘液を蒙るも末期に至れば大に下痢し惡臭を發す

尿は酸性の反應を呈し蛋白質を含む次第に羸瘦し皮毛光澤を失し營養不良の爲めに斃る

療法 主として原因療法を行ふべし即ち原因食餌にありと認めれば飼料を一變し牧場には人工肥料を施し飼料には多量のクロールナトリウムを混ぜべし醫藥は磷酸石灰を毎日一乃至二回一食匙宛與へ或は又健胃劑を投ず即ち稀鹽酸一五〇苦味丁幾一五〇を一回に與へ或は重炭酸ナトリウム四〇〇クロールナトリウム三〇〇を二日に與ふ

食毛病

原因 諸家の説未だ一定せざるも冬季飼料の欠乏は之れが主因たるが如し

徵候 本病に罹れば病初は壯健にして食慾異常なく發育良好なるも漸々多量の毛を嘔下するに至れば營養不良となり瘦削を加へ或は又胃腸炎を發して斃るゝに至る

療法 可及的食物の品質を改良し力めて滋養強壯の食を給し亞爾加里鹽類苦味藥の類を投ずべし

馬の急性胃腸加答兒

原因 愛寵過度、幼稚、虛弱、營養不良等は素因となり誘因は凍匠の食、變敗不潔の飼料、不消化の食物、不潔汚濁の水、塵埃及び濕氣を帯びたる芻藁、有毒の植物、苛烈の藥品、運動不足、飼料の急變、齒磨不正等なり

徵候 胃加答兒の症狀 病初食慾減損或は食思不定に

て異常の嗜好を呈し口内粘膜は初め充血乾燥し後には石鹼泡沫様の粘稠液を被ふり微に甘臭を放つ結膜は充血し體温多くは平温にして脈搏八乃至十二を増加す腹部は常の如く腸の蠕動微弱となり糞は乾固にして粘液を被ふり往々輕微の痙痛を發す

腸加答兒の症狀 初めは食慾佳良なるも病勢進めば廢絶するに至る主要の症狀は腸にあるを以て痙痛は胃加答兒よりも烈しく時々苦悶の狀を呈す腸の蠕動機は活潑にして雷鳴を發し糞は軟泥狀をなして惡臭を放ち後に至れば下痢を發し失禁自利、體力頓に衰ふ

療法 之れが治療法は攝生に注意しすべての刺戟性不消化物を避け滋養強壯軟和の食を給し病馬は溫厩に入れて

體軀を温覆し日々數回摩擦し晴天の日は舍外に出して暫時の引き運動を命ずべし
 内服薬は病症によりて異なる過食症にありては吐酒石六〇
 〇硫酸ナトリウム三〇〇〇アルテア根末、水各適宜を砥劑となし一日三回に與へ或は甘草三〇〇白糖八〇を一回に與ふ異常醱酵症には稀鹽酸一〇〇を與ふるか又はクレオリン一五〇甘草根末二五〇アルテア根末、水各適宜にて丸劑三個を作り日々一丸宛を與ふ消化力微弱のものには大黃根末一・五〇重炭酸ナトリウム、甘草根末各一〇〇アルテア根末、水各適宜にて砥劑を作り一日三回に與ふるか硫酸ナトリウム三〇〇〇クロールナトリウム一〇〇〇礮砂五〇〇を散劑となし毎飼料に一食匙宛を混じ與ふ下痢症に對

しては甘草二〇〇乃至三〇〇を白糖適宜に混じて與へ又は阿片末一〇〇アルテア根末、水各適宜にて砥劑を作り與ふ下痢尚ほ止まざれば收斂劑例へばタンニン酸一〇〇〇明礬一〇〇〇又は醋酸鉛五〇〇を亞麻仁煎に混じて與ふ
 本症に對し誘導法として膝部及下腹部に刺戟擦劑例之は四三一の合劑(的列並底油一分、安母尼亞擦劑三分、樟腦精四分)を塗布せば頗る奏効あり但し此際陰部、内股等の如き總て皮膚薄き部分を避くることに注意すべし

馬の慢性胃腸加答兒

原因 許多の動物は急性胃腸加答兒に於けるが如く素因を有す急性胃腸加答兒は轉じて慢性胃腸加答兒を招來し

又不正の管理、飼養失宜、粗硬の食、多量の穀、糠、剉藁の如き之れが誘因となる

徴候 本病に罹れば病獸は沈鬱の状を呈し食慾減損若くは廢絶し口内粘膜は乾燥、惡臭を放ち結膜は貧血し體溫、脈搏、呼吸共に常に異ならず腸の蠕動は増減常なきも多くは減退す通便は秘結し後には下痢す糞は小塊にして乾固惡臭を帶ぶ時々輕微の疝痛を發し久しきに至れば營養不良、皮毛光澤を失し衰弱日に加はりて死す

療法 之れが治法は有害の原因を除去し飼養管理に注意すべし醫藥は硫酸ナトリウム一〇〇〇・〇〇・〇クロトルナトリウム五〇〇・〇チンチアナ根末七五〇・〇を散劑となし一食匙宛食料に混じて與ふるか或は又重碳酸ナトリウム、クロトルナ

トリウム、各一〇〇〇・〇杜松子末五〇〇・〇の合劑を毎飼料中に一食匙宛混じて處すべし或は又大黃根末一五〇・〇人工方解、ス泉鹽五〇〇・〇を散劑となし毎飼料に二食匙宛與ふ其他便秘には硫酸ナトリウム、甘汞、蘆薈を處し下痢には阿片劑、收斂劑を投ずべし

牛の急性胃腸加答兒

此の病は胃腸の消化力缺乏し食物の停滯するより發するものにして其の原因は消化力微弱、體質虛弱、老齡、經久舍飼、弛緩性の食等は素因となり飼料の過多、冷熱の食、寒季の放牧、不良不消化の食、變敗不潔の飼料、飼養失宜、不正の管理、過度の勞働等は之れが誘因となるものなり

徵候 此の病の徵候としては病獸は倦怠沈鬱し食慾欠損反芻泌乳共に衰へ間々惡臭の瓦斯を屢出す口内粘膜は充血乾燥し粘唾を流す腹部を壓すれば疼痛を訴へ第一胃の運動微弱若くは停止す糞は暗色を帯び惡臭を放ち粘液を被る後に至れば下痢し血液を混ざるに至る病牛は漸次營養不良、毛皮粗剛となり此際治せざれば衰弱愈々重さを加へ遂に虚脱に陥りて斃る病若し三週間以上に亘るときは治癒概ね効なし

療法 病初は絶食せしめ獸體を摩擦し直腸に手を入れて宿糞を排除し又は石鹼水の灌腸を行ふ内服薬は稀鹽酸二〇〇水一〇〇〇を日々二乃至三回反覆せしむ或は又硫酸ナトリウム一〇〇〇ゲンチアナ根末三〇〇を頓服せしめ

め食慾、反芻共に無き時は吐酒石八〇白黎蘆根末一〇〇甘草根末五〇アルテア根末、水各適宜にて舐劑を作り與ふべし馬の本症の場合と等しく腹壁に刺戟擦劑の應用頗る妙なり

牛の慢性胃腸加答兒

原因 急性胃腸加答兒の原因となるべきものを永く持續するより來る其他原因となるべきものは咀嚼不全、第一胃又は第二胃と腹壁の癒着、胃中の腫瘍等なり

徵候 此の病は病候の時々弛張するを以て特徴となす之れに罹りし牛畜は食慾衰へ反芻作用停止し乳汁の分泌も亦減少するに至る第一胃の運動は衰へ時々屢氣を發す胃

中食物充滿すれば鼓脹を發す通便多くは秘結し糞は乾固にして暗色を帯び粘液を被ふる或は便秘と下痢交々來ることあり病獸は漸次倦怠疲癆を來し皮温不正、毛皮光澤を失し屢々呻吟す病勢増悪すれば瘦削日に加はり虚脱に陥りて斃るゝものなり

療法 初期は斷食若くは減食し攝生法に重きを置き醫藥として稀鹽酸二〇〇水一〇〇〇を一日三回に與へ又重炭酸ナトリウム、硫酸ナトリウム、クロールナトリウムの類を與ふ便秘には硫酸ナトリウム一〇〇〇乃至一五〇〇を處し或は之れに吐酒石七〇〇を混じ或は之れに人工カル、ス泉鹽の大量を投ずべし

牛の急性鼓腸

原因 牛に屢々發する症にして胃中の食物酸酵して多量の瓦斯を蓄積する病なり而して之れに急慢の二種あり其の主なる原因は多量の食物殊に酸酵性の青草を過食するにあり其他苜蓿、荳科植物、製造物又は醸造物の残渣は之れを誘發するなり

症候 病畜は食慾衰へ或は廢絶し反芻、泌乳共に歇止し往々不安亢奮し頻りに呻吟疼痛を訴ふ結膜は潮紅し呼吸促進困難を來し體温上昇す脈搏は疾速となり遂に手に觸れざるに至る腹部殊に左側は大に膨脹し之れを打てば鼓音を發し壓すれば知覺過敏にして疼痛を訴へ且つ緊張す第一胃の運動は微弱となり若くは全く歇止し通便遲滯す末期に至れば呼吸困難を訴へ迷朦失神終に踉蹌として斃る

療法 輕症にありては患畜を靜かに牽きて運動せしめ盛んに藁束を以て腹部を摩擦し冷水を灌腸して瓦斯の排除を計り石灰水、アムモニア水、テレピン油、石腦油、燬製マグネシア水(四%)の如きを内服せしめ重症にありては木タールを塗布したる藁束を口角に固定し或は屢々舌を前方に引きて酸氣を催進せしめ此の如くして効なきときは套管鍼を使用し穿胃術を施すべし

反芻獸の第一胃食滯

原因 牛の消化器病中頻發する所の病にして之れが原因は青草、嫩莖、新穀、諸種の醗造物残渣等なり

症候 病畜は飼槽に近づかず後肢を以て腹を蹴らんとし

尾を左右に掉り呻吟苦悶の狀を呈し大に流涎す食思、反芻、泌乳共に廢絶し屢々酸氣を試み左腹側は膨大し之れを打てば濁音を發す第一胃の運動微弱となり通便秘結す體温は上昇せず脈搏は僅かに増加し呼吸促迫す結膜は充血し眼光鈍くして眼球突出す

療法 輕症は數日間減食し腹部を摩擦し蘆薈(三〇〇)——四〇〇(吐酒石(六〇〇)——八〇〇)硫酸ナトリウム(三〇〇〇)——一〇〇〇の如き下劑、吐劑を投ずべし然れども重症にありては胃切開術を行ふべし

幼獸の胃腸加答兒

原因 哺乳獸にありては不良の乳汁、母獸の消化器病其他

母獸の生活状態は其の子と密接なる關係を有す離乳獸にありては粗硬の食、不消化或は變敗不良の飼料、不順の天候等によりて起る

症候 幼獸本病に罹れば哺乳のものにありては能く哺乳せず倦怠疲勞し離乳獸にありては食慾減損し口粘膜乾燥舌苔を蒙ふり皮温不正、四肢厥冷す體温、脈搏、呼吸は共に異常なく初めは糞便乾固するも後に至れば柔軟となり遂に水瀉下痢を發し失禁自利し尾根、内股等を汚染す末期に至れば營養不良、體力頓に衰ふ

療法 哺乳獸にありては病若し母乳に原因するものと認むれば他の健牛に就きて哺乳せしむべし其他母獸の飼養管理に注意し凡て肥腹を促すべき食、變敗不良の食等は絶

對的に避くべし消化不良に對しては健胃劑を處し異常酸酵症には炭酸マグネシウム(五〇〇乃至一〇〇〇)、クレオリン(續駒三〇〇—五〇〇)羊兒〇・五—一〇〇)食滯症には硫酸ナトリウム五〇〇を亞麻仁煎三〇〇に混じて頓服せしむるか又は蓖麻子油(駒續五〇〇—一五〇〇)羊兒一五〇—六〇〇)を與へ下痢症に對しては阿片丁幾(駒續五〇〇—一〇〇〇)羊兒一〇〇—二〇〇)を投じ下痢尙ほ歇まざれば阿片末(續駒〇・二—一〇〇)羊兒〇〇・五—〇・二)大黃末(駒續五〇〇—一〇〇〇)羊兒〇・五—一〇〇)を處すべし

創傷性胃横隔膜炎

原因 本病は異物の爲めに生ずる牛の胃病にして其の原

因は尖鉢、鈍體の異物を嚥下するによるなり

徴候 病初食後又は運動に際し呻吟し苦悶の状を顯はす
腹下部を壓すれば劇痛を訴へ呼吸困難を來し努責に際し
横隔膜の運動疼痛あり食欲漸次減少し第一胃の運動廢絶
し通便遲滯し漸次瘦削するに至る病勢増進すれば咽喉部、
頸下部、前胸、腹部等に腫脹を發し慢性不治の胃病に陥る
療法 治癒の望みなし診斷確實せば速かに屠殺すべし

馬の疝痛

原因 疝痛とは腹腔内諸臓器の種々の疾病にして専ら疼
痛を發するものゝ總稱なるも其の疼痛は胃腸に限局する
場合にのみ稱するものなり

抑も馬に疝痛の多き所以のものは第一馬の胃は細小なる
こと第二馬は嘔吐すること能はざること第三馬の腸間膜
は過長にして弛緩なること第四馬の腸神経の末梢は極め
て鋭敏なることによる而して之れを惹起すべきものは飼
養管理の不適當なるによる即ち寒冷の胃觸、飼料の過多、變
敗不良の食、飼養不正、勞働の過度、寄生蟲、結石、結塊、腸管の諸
病(炎症、腸轉位、壘積、轉軸、箝頓)等其の主要なる原因なり又へ
ルニア中毒より來ること稀れならず疝痛の種類は種々に
して痙攣疝、過食疝、便秘疝、風氣疝、血塞疝、寄生蟲疝、轉位疝、壘
積疝、箝頓疝、中毒疝、結石疝等之れあり
徴候 本病の主徴は腹痛にあり即ち煩燥苦悶の状を呈し
頻に前肢を以て地を爬し時に腹側を顧眄し後肢を以て腹

を蹴らんとし尾を頻りに掉り四肢を腹下に集めて伏臥の
 状をなし或は頭頸を伸ばし大に呻吟して苦痛を訴ふ劇症
 にありては卒然地上に仆れ左右に滾轉し或は仰臥し四肢
 を腹上に縮め或は後體を地に踞す或は發狂の如く騒亂し
 跳躍、肝息、呻吟し或は人を襲はんとし或は飼槽を咬む食慾
 は全く廢絶し全身若くは局部に發汗し呼吸促迫し脈搏疾
 速となり體溫上昇して攝氏四十度乃至四十一度に達し結
 膜潮紅す蠕動音は欠如し通便秘結す糞は小塊にして頗る
 硬く粘液を蒙り往々不消化の物を混ず尿は疼痛の持續す
 る間毫も排泄せられず若し腸炎に轉ずれば結膜は甚だし
 く潮紅し脈搏細數、體溫上昇、冷粘汗全身を被ひ耳脚厥冷す
 るに至りて斃る

療法

治療せしむるの要旨は第一に疼痛を鎮め第二には
 通便を計り第三には腸炎を豫防するにあり即ち病馬は廣
 き厩舎に入れて多くの蓐藁を敷き藁束を以て屢々腹側及
 四肢を摩擦し腹部には四三一合劑、アムモニア擦劑或は樟
 腦精とテレピン油(テレピン油一、樟腦精一〇—二〇)の如
 き刺戟薬を塗り便秘症にありては牽て靜かに運動せしむ
 (其の場合に於ては之れを忌む)次で直腸を検査し宿糞
 を除去し微温湯又は石鹼水の灌腸を行ふべし劇烈なる疼
 痛あれば鹽酸モルヒネ〇・三—〇・四を蒸餾水一〇〇に溶解
 して一回に皮下注射し頑固の便秘には鹽酸ピロカルピン
 〇・二乃至〇・三を蒸餾水一〇〇に溶解して皮下注射すべし
 醫藥は清涼消炎劑を投じ下劑として硫酸ナトリウム三〇

〇〇に甘汞二〇——四〇を混じて一回に頓服せしむ或は又
蘆薈末四五〇カリ石鹼適宜にて丸劑一個を作り與ふ又利
尿の目的には硫酸ナトリウム二〇〇〇硝酸カリウム一五〇
〇杜松子末三〇〇の合劑を與ふ

牛の疝痛

原因 牛の疝痛は疊積、箝頓及格魯布性腸炎によるもの
外稀れにして之れが原因は既往の感冒、山地の勞働、過食、感
胃等なり

徵候 此の病に罹れば卒然劇烈なる疝痛を發し食慾、反芻
共に全廢し通便秘結す腸の蠕動音は全く聽えず肚腹は益
々膨大し知覺過敏となる脈は細數、體溫昇騰せず身體厥冷、

病勢増加して死す

療法 腸の箝頓及疊積によるものは手術によるの外なし
即ち箝頓は腹部を切開して箝頓せる部を整復し疊積にあ
りては右腹側を切開して疊積せる部を整復すべし其の他
の場合には沈痛藥、下劑を投じ石鹼灌腸亦試むべし

豚の疝痛

原因 不消化物の過食、寒胃、寄生蟲、腸疊積等は原因となる
徵候 不安興奮し頻りに呻吟苦悶し背を彎して伏臥す食
慾は初めより廢絶し間々嘔吐す通便多くは秘結し痙攣搐
搦を發して斃る

療法 溫暖なる豚舎に入れ藁束を以て腹部を摩擦し同時

に樟腦精とテレピン油(三：一)を塗布し時々灌腸を行ひ疼痛烈しきときは鹽酸モルヒネ〇・三を蒸餾水一〇〇に溶解して皮下注射し下劑として甘汞(一乃至四〇)を與ふべし但し豚には決して飲劑を用ゐるべからず

羊及山羊の疝痛

原因 寒胃、過食、食傷、酸酵及變敗の飼料等に原因す

療法 寒胃より來るものは發汗劑を與へ又過食に基因するものには緩下劑を投じ全身摩擦を行ひ灌腸を行ふべし

犬の疝痛

原因 腹部の厥冷、便秘、異物、寄生蟲、腸壘積等に基因す

症候 食思欠損、嘔吐を發し不安の狀を呈し或は秘結し或は下痢す體溫稍々上昇し、脈搏、呼吸共に疾速となる結膜は潮紅し四肢及耳は厥冷す

療法 原因によりて異なる腹部を溫包し微溫湯の灌腸を行ひ疼痛烈しきときは鹽酸モルヒネ〇・〇二乃至〇・〇五を蒸餾水五〇に溶解して皮下注射するか又は阿片丁幾三五乃至三十滴をアラビアゴム漿に混じて與ふ便秘あれば甘汞〇・〇五乃至〇・一を白糖適宜に混じて與へ或は又蓖麻子油三〇〇を頓服せしむべし

胃腸炎

原因 胃腸炎は疝痛より轉じ來るもの尤も多く感冒、冷熱

の飲食、刺戟性の飼料、其他異物、寄生蟲に基くものなり
症候 此の病に罹れば劇烈なる疝痛を發し疼痛は持續し
 患畜は跳動發狂の狀を呈し結膜大に充血し口腔粘膜炎は乾
 燥惡臭を放つ上腹は知覺過敏にして腹壁緊張す蠕動音は
 全く聽えず通便秘結し何等の下劑を投ずるも之れに應ぜ
 ず體温は昇騰し攝氏四十度乃至四十一度に達し脈は細數
 にして手に觸れざるに至る全身冷粘汗を發し四肢厥冷す
 病勢増進すれば昏睡の狀に陥り或は播擲を發して斃るも
 のなり

療法 病獸は安靜に保ち廣き厩舎に入れ藁束を以て腹部
 を按摩し同時に腹部に芥子精(八%)樟腦精とテレピン油(テ
 レピン油一、樟腦精二—三)の合劑を塗布し冷水又は石鹼

の灌腸を行ふ
 内服藥には疼痛劇烈なるときは鹽酸モルヒネ〇・四を蒸餾
 水一〇〇に溶解して皮下注射し硫酸ナトリウム五〇〇〇
 に甘汞四〇〇の合劑を頓服せしめ其他緩和包攝劑及清凉消
 炎劑の内用を試むべし虚脱に陥る虞れあれば樟腦精一〇・
 〇皮下注射すべし
 胃腸炎の初期に於て「アンチピリン」八〇(八瓦)の皮下注射極
 はめて妙なり就中豚に於て其の奏効殊に著るしきを認む
 豚には一回量一〇(一瓦)とす但し何の動物にせよ軀軀の大
 小、年齢の老幼等に應じて用量に増減あるべきは言ふまで
 もなし
 右の皮下注射は馬に於ては肩胛部其他適宜の部位に於

て行なふべく豚に在ては耳根の皮膚薄き部分を選びて爲すべし

黄胆

原因 本症は種々の疾病の一症候に過ぎずして特異の症にあらざり其の原因は胃、十二指腸加答兒の原因に同じく飼養の失宜、變敗の食、器械的、化學的、溫熱的の刺戟其他心臟病に基く鬱血并に傳染毒による

症候 患畜は沈鬱、疲勞の狀を呈し食慾減損、嘔吐を催し露出粘膜、殊に眼の鞏膜及結膜は黄色を呈し乳汁、尿、汗は黄色を帶ぶ胆汁の排泄停止するを以て頑固の便秘を來し尿は橙黄色を呈し胆汁の色素を含むに至る呼吸脈搏體溫共に

低下し衰弱を來し營養不良に陥りて斃る

療法 輕症は攝生療法のみによりて自然治癒するものなり即ち病畜は清燥の溫帳に入れて賊風の侵入を防ぎ馬體を溫覆し藁束を以て軀軀及四肢を摩擦し一日二三回暫時引運動を命じ馬には青草、穀、胡蘿蔔の如き易化の食を給し犬には生肉、乳汁、ソップの類を與ふ重症にありては醫藥の必要あり即ち馬にはクロールナトリウム二五〇重炭酸ナトリウム、龍膽末各五〇〇アルテア根末、水各適宜を以て舐劑を作り一日二回に與へ或は又甘汞五—六〇を二九となし與へ犬には人工カル、ス泉鹽一〇〇水一五〇〇を一日三回一食匙宛與ふ或は又甘汞〇〇六を白糖適宜に混じて與へ又蓖麻子油三〇〇を與ふるも可なり動物の衰弱甚だ

しければ馬に樟腦精一〇〇を皮下注射し犬に鹽酸キニ
子二〇〇赤葡萄酒二五〇を一日數回一食匙宛與ふるなり

肝臟實質炎

原因 變敗不潔の飼料、大熱、傳染病の經過中及中毒其他器
械的傷害より來る

症候 本病は徐々に發し初めは食慾不振或は不定にして
後には廢絶す病獸は倦怠沈鬱し頭を低れて飼槽に擡し昏
睡の狀を呈す初め通便の排泄あるも後に至れば秘結を來
す脈搏體溫共に異常なし病機進めば營養不良、皮毛光澤を
失し瘦削するに至る

療法 原因を除去し患畜は滋養軟和の食を給し犬には生

肉、卵、牛乳の類を與へ消炎劑、亞爾加里鹽類を試み必要に應
じては利尿劑を投ずべし

腹膜炎

原因 穿孔性の創傷、腹膜に被はれたる腹腔臓器の破裂及
近傍炎症の蔓延によりて起り或は又感冒より來ることあり

症候 腹膜炎を發すれば痛劇烈にして左右に滾轉し或
は四肢を腹上に集め跳躍騒亂す食慾廢絶して口内粘膜乾
燥す結膜充血し呼吸促迫を來し六十乃至七十を算し脈は
細數にして八十乃至百二十に至り體溫は攝氏四十一度乃
至四十二度に上り心悸亢盛にして心音頗る高し腹部の皮

膚は緊張して知覺過敏となり腸の蠕動音は麻痺の爲めに全く聴えず通便秘結し後に至れば大下痢を發し病勢増悪すれば敗血中毒又は心麻痺を起して斃るるなり

療法 初期は盛んに冷水を腹部に灌漑し次でプリーヌニ

ツツ氏罨法を行ひ同時に刺戟藥例へば芥子泥又芥子精(八乃至一〇%)を塗布し内服には吐酒石八〇〇硫酸ナトリウム三〇〇〇の合劑を二回に與へ或は甘汞二〇〇を硫酸ナトリウム三〇〇〇に混じて頓服せしむ或は又阿片末六〇〇甘汞二〇アルテア根末、水各適宜にて祇劑を作り頓服せしむ其他滲出液増加すればヂキタリス葉末(八〇)醋酸カリウム(四〇)杜松子末(三〇〇)ストロファンタス丁幾(二〇〇)の如きを與へ衰弱すれば衝動劑例之ば酒精、エーテル、樟腦精の類を

ム

腹水

原因 本症は炎症作用に因るに非らずして腹腔内に漿液の蓄積する症なるも單獨固有の症にあらずして種々の疾病の一徵候に過ぎず其の原因は心臟、腎臟、肝臟等の慢性病、腹腔の癌腫、肉腫、結核等にして又血液の變調に基くことあり

症候 食慾は漸次不良となり腹圍は膨大し之れを壓すれば腹壁の上部は弛緩し下部は緊張し波動を呈す打診すれば上部は鼓音を發するも下部は濁音を發す呼吸は困難を來し脈は疾速となり後には糸の如くにして手に觸れざる

に至る熱は多くは無熱なり末期に至れば心動衰へ四肢厥冷、毛皮粗剛となり胸腹下面、内股、陰囊、包皮等に冷浮腫を發し次第に衰弱し心麻痺又は瘦削によりて斃る

療法 原病治療を尤も必要なりとす即ち心臟病、腎臟病、肝臟病の治療を試むべし滲出過多なるときは穿腹術を行ふべし醫藥は馬にヂキタリス葉末六〇〇水三〇〇〇に浸出し之れに醋酸カリウム二〇〇〇を加へ一日二回に與へ或は又硝石三〇〇〇硫酸ナトリウム三〇〇〇の合劑を二回に與へ又ヂキタリス葉末一二〇杜松子末六〇〇アルテア根末、水各適宜にて舐劑を作り一日三回に與ふ犬には醋酸カリウム液、杜松子蒸各二〇〇茴香水五〇〇の合劑を毎三時一食匙宛與へ或はヂキタリス葉末一〇〇を水一五〇〇に浸出し

醋酸カリウム液、杜松子稠熬各一〇〇を加へ一日二回一食匙宛與ふ但し杜松子稠熬は杜松子五分と亞爾箇保兒及水各十五分を混和し煮て全量二十分に爲したるものなり

第二章 呼吸器病

呼吸器病とは鼻腔、喉頭、氣管、氣管支、肺及胸膜を侵す所の種々の疾病にして氣候の急變、激働、發汗後の手入不全、畜舎の不潔或は又換氣の不良等に因て發するなり輕微なるものは頻りに噴嚏し水様の鼻漏を漏らすも重症にありては痛咳を頻發し灰白若くは黄綠色膿様の鼻漏を出し體温多くは上昇し食慾欠損、呼吸促進を來し時に窒息に陥り斃死することあり初期輕症の際に其の保護及び攝養に注意せざ

れば重症に變じ或は腺疫其他の傳染病を繼發し易き危険あるを以て體軀を溫包し換氣及清潔法に留意し滋養に富める柔軟易化の飼料を給し蒸氣吸入法を行ふべし

鼻加答兒

原因 本症は専ら寒胃によりて發す

症候 病初鼻粘膜は充血乾燥し頻りに噴嚏を發し次で稀薄の鼻汁を漏らす末期に至れば粘液若くは粘液に膿を混じたる鼻漏を漏らす病若し咽喉に波及するときは咳嗽を發し嚥下困難を來し咽頭炎の症狀を現はすに至る

療法 輕症の鼻加答兒は攝生療法のみによりて自然に治癒することあり即ち通氣に注意し天氣晴朗の日は舍外に

出して引運動せしめ鼻翼、口腔等は冷水を以て頻々洗滌し飼槽も常に清潔にし良美の食を給すべし

重症のものにありては明礬、皓礬(一乃至二%)、クレオリン水(〇・五%)、石炭酸水(〇・五%)、千倍の昇汞水等を以て鼻腔を洗滌消毒し石炭酸、クレオリン、テレピン油、木タール(各一%)を以て吸入を行ひ次の如き處方を試むべし

硫酸ナトリウム二〇〇〇吐酒石一五〇 茴香末一五〇〇
アルテア根末、水各適量

右爲祇劑一日二回二日間に與ふ

又人工カル、ス泉鹽一〇〇〇

右一日二回朝夕に與ふべし

急性喉頭加答兒

原因 冷濕の胃觸、皮膚の冷却或は刺戟性の瓦斯吸入若くは器械的の暴力(壓迫、異物)によるなり

徴候 咳嗽を以て主徴とす咳嗽は初期短節粗厲にして疼痛を帯び同時に粘液を漏らす喉頭部を壓すれば知覺過敏にして疼痛を訴へ鼻孔より粘液を漏らす重症のものは喉頭周囲の淋巴腺多少腫脹し食慾廢絶す惡寒戰慄、大熱を發し呼吸及嚥下困難を來し頭を低れて沈鬱の狀を呈す

療法 攝生法に注意し患畜を溫覆し喉頭部には毛布類を以て纏絡するかプリロスニツ氏器法を施し又は刺戟擦劑(アムモニア擦劑、芥子精(即ち芥子油五〇〇酒精一〇〇〇)を塗

擦し毎日二回乃至三回蒸氣吸入法を試むべし

内服薬は咳嗽頻發すれば鹽酸モルヒネ〇・一——〇・二を皮下注射し或は莨菪越幾斯一〇〇鹽酸モルヒネ〇・四甘草根末、水各適宜にて砥劑を作り一日二回に與へ小家畜には鹽酸モルヒネ〇・〇五苦扁桃水、茴香水各二〇〇の合劑を一日三回十五乃至二十滴を與ふ或は又鹽酸モルヒネ〇・〇三杏仁水四〇〇單舍利別適宜水六〇〇の合劑を一日三回に與ふ食慾欠損すれば馬に硫酸ナトリウム一五〇〇炭酸カリウム五〇〇甘草根末二〇〇〇水適宜にて砥劑を作り一日二回に與ふ

慢性喉頭加答兒

原因 本病は馬及犬に頻發し寒胃、器械的の刺戟及傳染毒

に基因するなり

徴候 本病にありても亦咳嗽を以て主要の徴となし咳嗽は乾燥粗厲にして咳する毎に呻吟し頸を伸ばし嘔吐を試むるも病畜は甚だ活潑にして食欲衰へず

療法 病畜を安靜にし刺戟興奮を避けブリーズニツ氏器法を行ひ石炭酸、テレピン油、食鹽水(各一%)の蒸氣吸入を行ひ礮砂五〇〇クロールナトリウム、甘草末各一〇〇〇ヒヨス葉末三〇〇〇水適宜にて氾劑を作り一日二回二日間に與ふべし

格魯布性喉頭炎

原因 本病は牛に尤も多く發し馬及猫之に次ぎ他家畜に

は稀なり氣候の急變に際し寒胃に由りて發し又喉頭粘膜の器械的損傷に原因するなり

徴候 病畜は惡寒戰慄、大熱を發し頻りに痛咳を發し呼吸困難にして喉頭部は腫脹し狹窄音を發するに至る

療法 蒸氣の吸入を行ひブリーズニツ氏器法又は溫罽布、水銀軟膏を施し硝酸銀、明礬の如き收斂劑を應用すべし

喘鳴症一名喉頭偏癱

喘鳴症とは返廻神經麻痺の爲めに喉頭開張筋の萎縮を來し喉口狹隘となり吸氣に當りて異常音を發するものを云ふ但し極めて劇症にありては呼吸にも亦之れを發す

原因 本症は遺傳病にして牝馬よりも牡馬に多く頸の細

長なるものは素因を有す重症性咽頭炎の經過中或は頸部に於ける腫瘍は返廻神経の麻痺を來たすといふ

徴候 返廻神経麻痺の主徴は吸息時に於て喉頭に狹窄音を發するにあり其の音は笛聲、吹管聲、鼾聲又は新革音に類し強弱一様ならず而して此音は速歩又は馳驅の後殊に著しく靜止すれば止むに至る音の強弱に應じて呼吸困難の徴を發す

療法 治癒多くは望みなし喉頭を切開し麻痺せる聲帶并に披裂軟骨を切斷すべし

急性氣管支加答兒

原因 急性氣管支炎は馬に尤も多く犬、牛之れに亞ぐ幼稚

の動物、虛弱の體質、營養不良、愛護過度等は之れが素因となり寒胃、器械的、化學的の刺戟等は之れが誘因となるなり

徴候 咳嗽は主徴なり初期は乾燥粗厲にして疼痛を帯び末期に至れば濕性に變じ較々緩解す兩鼻孔より水樣液、粘液若くは膿樣液を漏らす病畜は大に沈鬱の狀を呈し食欲減損、脈搏疾速、体温上昇し三十九度五分乃至四十一度五分に至る輕症は四日乃至八日にして治するも重症は死に陥り又は慢性に轉ず

療法 力めて攝養に注し病畜を溫保安靜ならしめ滋養易化の食を給すべし局部療法として石炭酸、クレオリン、明礬、テレピン油(各一%)等の蒸氣吸入を行ひ内服には對症療法を行ふべし即ち熱度高きものには解熱劑を與へ咳嗽甚

だしきものには鎮咳劑を與へ食慾不良には消化催進藥を與ふ祛痰劑として大動物に礮砂二四〇吐酒石九〇杜松子末三〇〇の合劑を一日三回に與へアセトアニリド二〇〇甘草根末、水各適宜にて丸劑一個を作り熱度高き大動物に與ふ食慾不振には硫酸ナトリウム、クロールナトリウム各三五〇〇甘草根末一〇〇〇を散劑となし毎飼料中に一食匙宛與ふ

兩胸壁に刺戟擦劑を應用すべし

慢性氣管支加答兒

原因 本症は急性氣管支加答兒より轉ずること最も多く又急性氣管支加答兒の原因となるべきものは皆本病の原

因となる

徵候 急性氣管支加答兒と同じく咳嗽は主徵にして同時に多量の粘液又は膿汁を漏らし氣管支擴張及肺氣腫を發するときは息癆の徵を呈し呼吸困難を來し晩期に至れば營養不良甚だしく衰弱するに至る

療法 畧ぼ急性症に同じく肺水腫、肺炎の發生する虞あらば衝動劑若くは吐劑を投ずべし硫酸ナトリウム三〇〇〇礮砂五〇〇杜松子末一五〇〇の合劑を三包となし一日三回祛痰の目的を以て大家畜に與ふ

肺充血

原因 本病は營養佳良の貴種馬に多く大勞働後又は駿速

の運動中に發し、易く殊に炎暑の候に多しとす。其他冷熱の急變、刺戟性の瓦斯にも基因することあり。

徵候 病獸は不安鬱憂の狀を呈し、時に淺く且つ短かき咳嗽を發し、脈は頻數強實、心悸亢盛、呼吸促迫し、一分時に六十乃至八十を算し、鼻翼を濶開し、時に軀血を發す。或は又鼻孔より泡沫様の液を漏らすに至る。聽診すれば氣胞音著しきものなり。

療法 患者を安靜に保ち、大刺絡をなして急を救ふべし。胸部には芥子精(八—一〇%)を塗擦し、硫酸ナトリウム五〇〇〇・〇硝酸カリウム三〇〇〇を頓服せしめ、力めて冷水の灌腸を試み、心臟の衰弱著しき時は樟腦精一〇〇〇の皮下注射を行ふべし。

肺出血一名咯血

此の病は獨立の症にあらずして諸原病の一徵候に過ぎず。馬及犬に尤も多く、他家畜に稀れなり。

原因 大勞働は主要の原因となるものなり。即ち過度の騎乘、震盪、衝突、重貨輓曳等は咯血を來す。犬に於ては心臟系繼虫に原因す。

徵候 病獸は不安震戰著しく憂鬱し、大に發汗し、鼻孔及口腔より泡沫を混じたる鮮赤色の血液を漏らし、呼吸促迫、皮膚は冷却し、脈は細小にして手に觸れざるに至る。

療法 盛んに胸部に冷水を灌漑し、止血薬を用ふ例へば、
角(牛)二五〇—五〇〇 馬一五〇—二五〇 羊五〇—一〇〇 豚

二〇〇—五〇〇を一日數回反覆す）タンニン酸、明礬、醋酸鉛等の如し

肺炎

馬の格魯布性肺炎

原因 本症は過度の勞働、冷熱の急變、刺戟瓦斯の吸入、寒胃等による

徵候 本症に罹れば氣管支加答兒の如き症狀を呈し惡寒戰慄、鬱憂の狀をなし結膜潮紅、食慾廢絶し前肢を開張して大概ね伏臥せず時々淺く且つ短かき咳嗽を發し通便遲滯す呼吸は促進し一分時六十乃至七十を數へ脈搏は六十乃至一〇〇〇を算し体温上昇し四十度五分乃至四十一度五分に至る而して鼻孔より帶赤黄色又は鏽色の液を漏らす

胸部を打診すれば第一期に於て滿音又は輕濁音を發し第二期に至れば著しく濁音となり末期に至れば滿音を發す患部に於ける聽診は初期囉囉音を聽取するに至る

療法 患畜の安靜を計り力めて攝生に注意し胸部は冷湯し刺戟藥例へば芥子精(八—一〇%)を塗り熱度高きときは安知必林、アセトアニリド(一五〇—二〇〇)を與へ心悸微弱なればデキタリン葉末八〇—一〇〇に硫酸ナトリウム或は重炭酸ナトリウムを和し與ふ吸收機緩慢なれば醋酸カリウム液一〇〇〇—一五〇〇に杜松子末三〇〇を和し祇劑となし與ふべし

牛の格魯布性肺炎

原因 未だ詳ならざるも理學的若くは化學的の刺戟物の

吸入に因するものならんといふ

徴候 本病に罹れば全身大違和の徴を呈し呼吸頗る困難に陥り患畜は頻りに呻吟し痛咳を發し高熱を生じ打診に於て初期異常を認めざるも病氣の亢進するに従ひ鼓脹又は輕濁音を呈し聽診すれば嘩嘖音若くはラッセルを聽く

療法

大體馬に同じく盛んに胸部を冷湯し冷水の灌腸を行ひ解熱劑、衝動劑を與ふべし

加答兒性肺炎

本症は牛に尤も多くして間々結核菌侵入の原因となる馬、羊、豚、家禽等には稀れなり

原因 氣候の急變、冷濕の冒觸、塵埃、煙其他異物及徴の吸入

等に原因す

徴候 病獸は食慾、反芻、泌乳等殆んど廢絶し脈搏頻數、呼吸頗る困難を來し大熱を發し體溫は攝氏三十九度五分乃至四十一度五分に至り弱き痛咳を發し胸部を壓すれば疼痛を訴ふ打診すれば不正の輕濁音を發し聽診すれば氣胞音又はラッセルを聽く

療法 病獸を溫覆し力めて滋養食を給し厩舎の通氣を計り鼻漏は頻々清拭すべし胸壁には芥子精(八乃至一〇%)を塗り或は冷器法を試みクレオリン、テレピン油、木タール、石炭酸等の蒸氣吸入を行ひ内服藥としては解熱劑例へばアシチピリン馬には一五〇〇——二〇〇〇牛には一五〇〇——二五〇〇羊豚には五〇〇——一〇〇〇犬には一——二〇〇猫には〇・二——〇・五

を犬及反芻獸には液劑馬には祇劑又は丸劑として與へ或は又アセトアニリド牛馬に二〇〇—四〇〇羊に二〇〇—五〇〇豚一〇〇—二〇〇犬に〇二五—一〇〇を丸劑、祇劑、散劑、振盪合劑として與ふ心臟衰弱の徴あればヂキタリス葉末牛馬に二〇〇—五〇〇羊豚〇五—一〇〇犬に〇一—〇三猫に〇〇五—〇一家禽に〇〇二—〇〇五を馬に祇劑又は丸劑とし牛羊には振盪合劑犬には浸劑、散劑として與ふ或は又カフェイン牛馬に五〇〇—一〇〇〇大犬〇三—一〇〇を皮下注射し其他祛痰藥礮砂馬に八〇〇—一五〇〇牛に一〇〇〇—二五〇〇羊豚に二〇〇—五〇〇犬〇二—一〇〇猫〇一—〇三を液劑、丸劑、散劑、祇劑として與へ又吐酒石馬に〇五—二〇〇牛に二〇〇—五〇〇羊豚〇二—〇五犬〇〇一—〇〇〇五猫〇〇〇五—〇〇〇一を與

へ咳嗽甚だしきときは杏仁水、苦扁桃水を伍用すべし

異物性肺炎

原因 嚥下肺炎は咽頭炎及食道炎の爲めに嚥下困難を來し誤て食物を氣道内に嚥下するに因る馬に最も多く牛之に亞ぐ他の家畜には稀れなり
 注入肺炎は刺戟苛烈の藥液を粗暴に飲ましむる爲め氣道内に竄入するに由るものにして豚に尤も多發し牛馬にも亦稀れなりとせず
 外傷性肺炎は胸壁の挫傷、衝突其他釘鉞を嚥下するに因る
徴候 病畜は不安戰慄し呼吸促進、脈は細數にして一分時に八十乃至百を算し稀れに無熱なるも多くは大熱ありて

呻吟し漸々倦怠衰弱に傾き後に至れば大下痢を發し昏睡の狀態に陥りて斃る初期加答兒性肺炎の徵を呈し肺壞疽、胸腔洞を發するときは汚色惡臭の鼻漏を漏らし呼吸は頗る惡臭を帯び打診上鼓音、金屬音、聽診上に於てはラッセル又は拍水音を聽取するものとす

肺氣腫

原因 過度の勞働、疾驅、競争、長途の運搬、強烈なる咳嗽、損傷等は之れを誘發す牛馬に尤も多く牛は刺戟性の飲劑肺に

侵入し或は尖體の肺を傷つくる等によりて發す

徵候 病獸の食慾衰ふるか又は廢絶し荐りに口を開き頸を伸ばし大に呻吟す呼吸は頓に促進し困難益々加はる打診すれば鼓音を發し聽診上多くは囉音を聽くも稀れには乾性ラッセルを聽く

療法 急性のものは治療の違なし慢性のものは息癆の條下に述ぶるが如く確實なる療法なし皮下に生ぜる氣腫は切開して綳帶を施すべし

息癆

此の病は慢性無熱の呼吸困難なる不治の疾病なり

原因 本病は種々の疾病の總稱にして肺氣道及心臟等の

疾患は之れが原因となる即ち慢性肺實質氣腫、肺の腫瘍、肺臓と肋膜の癒着、肺血行障害、肺臓の異常壓迫（胸水、横隔膜のヘルニア、肝臓の腫大）鼻腔、咽頭、氣管等の狭窄、心臓の瓣膜病、心臓擴張其他飼養失宜等とす

徴候 主要の徴は呼吸の困難にあり而して病の輕重によりて其の症狀一樣ならず概して靜止の状態にありては呼吸に變狀なきも運動後呼吸困難となるを常とす今息癆患馬を確診せんと欲せば少しく劇動せしむれば忽ち呼吸の困難を來し五十乃至六十を算し全身發汗するに至る其の狀健馬の比にあらずして呼息の困難は吸息よりも甚しく大に腹筋の力を藉り二段の作用をなす其の第一段は短かく第二段は長く且つ假肋骨の後方大に收縮し所謂息癆溝

を生ず之れと同時に膝部は扇動一突一陥し尙ほ肛門の運動を顯はす而して健馬にありては運動疾速なる呼吸は十乃至二十分時を經過すれば安靜となるも本症に罹れば一時間餘を要し靜立の際は時々弱き濕咳を發し往々之と同時に鼻孔より液を漏らす脈は不正にして一分時に八十乃至百を算す漸次營養不良に陥るなり

療法 本症は全く不治に屬するも攝生及諸般の注意は多少病勢を輕減せしむるを得るものなり藥物療法は多くは効なし從來砥石を賞用するも其の効驗は疑はし其の量は砥石〇・一——〇・五を飼料に混じて與へ或は亞砒酸カリウム液五〇〇乃至五〇〇〇を漸次應用す總て本症に罹れるものは種畜に供用す可からず

肋膜炎

原因 肋膜炎は主として寒胃、外傷、傳染毒等に基き又寒冷時に於ける過度の勞働に起因す

徵候 通常惡寒戰慄を以て初まり體溫頓に昇り四十一度に達す脈は細數にして一分時に六十乃至百を算す呼吸は促迫困難となり胸部を壓すれば疼痛を訴へて呻吟し概ね咳嗽を發す打診上初期異常なきも胸腔内に滲出物増加すれば濁音を發するに至る聽診すれば摩擦音を聽くも滲出物増加すれば却て不正の呼吸音を聽き或は全く無音なり

療法 初期は胸壁に冷濕布を纏ひ或は冷水を灌漑し或は又全身に冷濕布を纏ふ芥子泥若くは芥子精(芥子油一二〇

酒精二〇〇〇)を胸壁に塗布し大熱あればアセトアニリド(一五〇—二〇〇)アンチピリン、フェナセチン(一五〇—一八〇)を與へ滲出液の吸収を促す爲めに利尿劑例へばヂキタリス葉末馬に二〇—五〇犬に〇—一〇二醋酸カリウム(一日量三〇〇)醋酸安母尼亞液(一日量一五〇〇)を與へ下劑として甘汞二〇を白糖四〇—八〇に和して與へ催唾發汗劑として鹽酸ピロカルピン馬に〇一牛〇二—〇四犬〇〇〇五—〇〇二を皮下注射すべし尙吸收機緩慢なればブリスニツ氏の器法を行ひ滲出液多量にして呼吸困難なるときは穿胸術を行ふべし

胸水

原因 本病は諸家畜に發するも就中馬及犬に多し血液異常の爲めに全身の水腫に併發し或は慢性の心臟瓣膜病、肺病、腎臟病に於て血液の鬱滯するに由て起るものなり

徵候 呼吸困難、理學的診候及熱の欠如を以て主徵となす打診すれば水平に濁音を發す其他心臟病、肺臟、腎臟病等原病固有の徵候を呈するものなり

療法 患畜には可及的飲水を減じ利尿劑、強心劑を用ゐる若し窒息の恐れあれば穿胸術を行ふべし

第三章 循環器病

心臟の肥大及擴張

原因 實性肥大の原因は過度の勞働、血液循環の障礙、心臟

瓣膜病、肺病の結果等にして心臟の擴張は實性肥大の繼發症として發す

徵候 心跳強盛にして胸壁を震盪し脈搏細數、不正、呼吸促進し病獸は不安にして憂愁の狀を呈し震戰發汗す心音は不正にして第一音は金屬音を帯び第二音は微弱なり而して頸靜脈搏動を見ること稀れならず晚期に至れば眩暈失神遂にチアノーゼ(藍色症)及水腫を發し瘦削して斃る

療法 力めて興奮と勞働を避け滋養食を給すべし藥物療法としては強心劑、衝動劑及強壯劑を處すべし即ちデキタリス葉末(馬二〇—五〇 犬一—二) カフェイン(牛馬五〇—一〇〇 犬一—二) 又はストロファンタス丁幾(牛馬一〇〇—二五〇 犬一〇—二五滴)を用ひ酒精、エーテル、樟腦の

如き衝動劑を應用すべし

牛の心嚢炎 創傷性の心嚢炎及心臓炎

原因 創傷性の心嚢炎及心臓炎は牛の心臓病中尤も多き症にして釘、鉞、鐵線、小刀等の嚙下に因る

徴候 病牛は食欲漸次減少し倦怠沈鬱に陥り起臥、運動、呼吸に當り疼痛を訴へて呻吟し脈は頻數、不正、不等にして一分時百乃至百二十を算へ体温亦不定にして三十九度乃至四十度又は四十一度に達す初期心搏動盛んにして往々跳動し打診すれば鼓音を呈し聽診すれば初期には心嚢の摩擦音、後には拍水音又は金屬音を聽く心嚢の滲出物は肺を壓迫し爲めに呼吸の困難となり咳嗽を發す又屢々頸靜脈

の搏動を見る咽喉部、頸下部、前胸部、前肢間、胸腹の下面等に浮腫を發す晚期に至ればチアノーゼを呈し脱力衰弱して斃るゝに至る

療法 治療の施すへきなし故に診斷確實するまで對症療法を行ふ初め健胃劑を投じ或は又強心劑を與へ診斷確實せば速かに屠殺すべし

馬及他家畜の心嚢炎

原因 寒胃に原因するもの尤も多く又傳染病の經過中に發す

徴候 本病に於ては初期心動強盛にして往々暴跳し左右兩胸壁に就て心動に觸るも後に至れば微弱となる打診すれば濁音界増大若くは鼓音を呈す脈搏細弱、呼吸困難、体温

三十九度乃至四十度五分に至り時に頸靜脈の搏動を見る
療法 興奮及運動を避け清涼消炎療法を行ふ即ち心部を冷水を以て冷湯し或は盛んに冷水を灌漑し或は又芥子泥若くは芥子精(八乃至一〇%)を施し内服にはヂキタリス葉末を處す馬に二〇乃至五〇〇犬〇〇五乃至一〇一を數次反覆し或は馬に硝酸カリウム一五〇硫酸ナトリウム二五〇〇杜松子末五〇〇海葱一〇〇硫酸マグネシウム二五〇〇を與ふ衰弱著しければ馬に樟腦精一〇〇を皮下注射すべし

心筋炎

原因 寒胃及勞働過度に由るも多くは傳染毒によりて發

徴候 病獸は倦怠沈鬱にして震戰眩暈を來し急に斃死す

ることあり心搏動は初め強盛にして末期に至れば微弱となる
療法 患畜には良美の食を給し運動及興奮を避け強心劑、利尿劑、解熱劑を與ふべし

急性心内膜炎

原因 牛に於ては寒胃又は儂麻質斯性多發關節炎に併發し馬に於てはヂキタリスの中毒又は肺炎、儂麻質斯性蹄炎劇性痛痛に續發するも多くは血中に循環せる傳染毒の刺戟によりて發す

徴候 全身大違和、倦怠、衰弱、呼吸困難、大熱を發し脈は細數不正にして一分時に八十乃至百六十を算す往々間歇す心

悸亢盛にして心音は初期異常なきも漸次濁音となり尋て雑音を聴くに至る

療法 本症に於ても過度の勞働と興奮を避け安靜に保ち心臓部は間斷なく冷水を灌漑し牛馬に吐酒石一五〇〇硫酸ナトリウム七五〇〇アルテア根末、水各適宜にて舐劑を作り二日間に與へ或はヂキタリス葉末一二〇〇アルテア根末五〇〇〇水適宜にて丸劑二個を作り一日に與ふ其他強心劑、解熱劑、衝動劑を與ふべし

慢性心内膜炎

原因 急性心内膜炎より轉じ又反覆の寒冒、大興奮、過度の疾軀、衝動等に基く

徵候 初期に於ては心臓の代償作用旺盛なるを以て著しき病狀を呈せず唯過劇の勞働若くは興奮の後血行障害の徵を呈するも晩期に至れば心力減衰或は心搏動、脈搏の疾速を來し呼吸困難、眩暈、水腫等を來し遂にチアノーゼ并に靜脈搏動を呈して斃る

療法 對症療法として利尿劑例へば醋酸カリウム馬に一五〇〇乃至三〇〇〇犬二〇〇乃至四〇〇甘汞馬に二〇〇乃至三〇〇海葱五〇〇乃至一〇〇〇杜松子末二五〇〇乃至五〇〇〇を與へ心臓の衰弱せるものには強心劑牛馬にヂキタリス葉末一〇〇〇稀酒精一〇〇〇〇單舍利別適宜に振盪し一日一食匙を與へ犬にはヂキタリス葉末二〇〇を沸湯一五〇〇〇に浸出し日々三回一食匙を投じ著しく衰弱すればエーテル二〇〇〇酒精

二〇〇を馬に皮下注射すべし

第四章 泌尿器病

腎充血

原因 實性腎充血は刺戟苛烈の食品、微爛、濕潤、變敗の麥及乾芻、泥沼地方の惡水等に基く

虚性充血は心臟の瓣膜病、肺動脈瘤、血塞、腫瘍、腎靜脈并に腎動脈の血塞の如き凡ての血行障害による

徵候 實性充血の徵、病獸は少しく背を彎して歩行す尿は

稀薄にして其の色薄く尿量頗る多く健康獸にありては五リートルなるも本病に罹れるものによりては多きは二五リートルに達す而して比重は大に減じ健康獸にありては

一〇四〇なるも本病に於ては一〇〇一乃至一〇〇五とな

る
虚性充血の徵、尿量頗る減じ尿中蛋白質を含み時々血液を混ず

療法 實性充血に於ては原因を除去し腸誘導の目的を以て硫酸ナトリウム、人工カル、ス泉鹽の如き緩下劑を投じ虚性充血にありては原病を治しデキタリス葉末の内服を試むべし例へば牛馬にデキタリス葉末一二〇アルテア根末一二〇〇水適宜にて丸劑二個を作り日々一丸宛を與へ或は又ツワツルシ葉末五〇〇杜松子末五〇〇甘草根末五〇〇水適宜にて祇劑を作り一日二回に與ふ

急性腎炎

原因 大体腎充血の原因に同じく腰部の衝突、顛倒、蹴踢等は器械的原因となり又寒胃、中毒にも起因することあり

徴候 主徴は尿にありて尿量頗る減じ尿中蛋白質を含み其の比重は著しく高く濃厚にして溷濁變色し往々血液を混ざることあり病初食欲減損、通便遲滞し脈搏、體溫共に變化なく腎臟部を壓すれば疼痛著しく往々疝痛の状を呈す末期に至れば胸腹下面及陰囊等に水腫を發し尿毒の徴を呈す即ち體溫上昇し呼吸促進、尿臭を帯び迷朦失神し痙攣を發して斃る

療法 攝生に注意し換氣善良なる溫厩に入れて安靜なら

しめ凡て刺戟性の食を禁じ消化し易き飼料を與へ犬には牛乳、卵、肉等を與ふべし腎臟部は初期冷湯し後には蒸湯す又藁束を以て腹部を摩擦し踵て溫覆す犬豚は微浴をなさしめ且つ溫覆す醫藥は發汗劑、緩下劑、利尿劑を與ふ發汗劑としては鹽酸ピロカルピン〇・二を蒸餾水五〇に溶解して馬に皮下注射し牛には〇・四乃至〇・五犬には〇・〇〇五乃至〇・〇二を皮下注射し下劑としては甘汞二〇乳糖八〇を馬に與へ或は又蘆薈末三〇〇軟石鹼適宜を以て丸劑一個を作り利尿劑としては牛馬に醋酸カリウム(三〇〇)硝酸カリウム(三〇〇)デキタリス葉末(一二〇)を、小動物に醋酸カリウム、硫酸ナトリウム及びカフェインを用ふ

慢性腎炎

原因 寒胃、化學的毒物(銅、鉛の鹽類)及傳染毒の刺戟に基因し又稀れに急性腎炎より轉じ來る

徵候 本病は始めは緩慢の經過を以て發し來るを以て顯著の徵候を認めざるも時日を経れば食慾欠乏、漸々倦怠し後肢、胸腹下面等に浮腫を發す脈は硬くして緊張し體温は稍々上昇し心悸亢盛となり尿は其の量大に減じ蛋白、尿圓嚙、腎上皮細胞、脂肪球、赤血球を混じ比重頗る高し茲に於て病勢増劇すれば呼吸困難、眩暈衰弱し遂に尿毒症に陥りて斃る

療法 攝生法、醫藥療法共に急性症に同じ

尿閉

原因 本病は次の諸原病によりて發す

- (1) 膀胱及尿道の異物例へば膀胱及尿道の結石、沈澱、カテーテルの断裂等
- (2) 尿道及膀胱頸の壓 閉鎖例へば攝護腺、子宮、卵巢若くは膀胱の腫瘍等
- (3) 進尿管の麻痺例へば膀胱炎、脊髓、卒中、疝痛等
- (4) 膀胱括約筋の痙攣例へば寒胃、膀胱内の異物等

症候 患獸は興奮不安、疝痛の狀を呈し頻りに窘迫して排尿を試み膀胱を壓すれば疼痛を訴ふ若し膀胱破裂するときは腹痛頓みに止み腹部は膨大し精神痴鈍となり脈搏疾

速し遂に手に觸れざるに至り呼吸困難、体温上昇し筋肉震顫、尿利絶無にして痙攣播擲を發して斃る

療法 器械的の障害にありては尿道切開術、膀胱切開術若くは刺穿術、碎石術を行ひ進尿管の麻痺によるものは腔又は直腸より膀胱を壓しカテーテルを入れて尿を排去し括筋痙攣によるものは腹部及會陰部にテレピン油、茴香油を塗布し或は之れを内服せしめ膀胱麻痺には硝酸ストロキニール馬に〇〇五乃至〇一犬〇〇〇一〇〇〇三を腰部に皮下注射すべし但し常に新調し百倍の蒸餾水に溶かして應用すべし

膀胱加答兒

原因 寒胃、毒藥及傳染毒に原因し或は附近臓器の炎症に續發す

症候 尿意頻數にして反覆少量の尿を漏らし間々淋瀝滴下し排尿に當り大に窘迫し苦痛を訴へ疝痛の徴を呈す膀胱を壓すれば疼痛顯著にして不安となる尿は落屑せる扁平上皮、白血球、蛋白質、三基鹽の結晶并に細菌を含めり肉食獸にありては酸性反應は變じて中性又は亞爾加里性となるなり

療法 患畜は温厩に入れて体軀を温保し刺戟苛烈の食物は之れを避け滋養強壯の飼料を與ふべし醫藥としてはザリチール酸牛馬に五〇〇を二回に與へ或は又安息香酸一〇〇アルテア根末、水各適宜を舐劑となして與へ犬にはウ

ワツルシ葉煎汁(一〇〇)六〇〇〇單、舍利別適宜を一日二回一食匙宛與ふるか又はクロール酸カリウム、ナフタリン、タンニン酸を與へ慢性膀胱加答兒にはテレピン油、コツバイハバルサムを投じ外用にはクレオリン〇・五硼酸、石炭酸各一乃至三%昇汞千倍乃至五千倍溶液にて膀胱を洗滌するにあり

反芻獸の血色素尿症

原因 反芻獸に於ける血色素尿症(ヘモグロビンユリア)の原因は長く不明に屬し或は之れを變敗の食に歸し或は泥沼沮洳の牧場に於けるミアスマ毒の仕業と做し或は毛糞料、大戟科、樺木科等の有毒植物を以て病原と作す等諸説紛

々たりしが近時の發見に據りて本病は一種の吸血壁蝨より傳へらるゝ血液寄生蟲に蚤由するの事實完く判明となり此の血液寄生蟲は極はめて云微なるものにして赤血球内に侵入して之れを崩壊するに因りて血色素尿を生ず

徴候 食慾減損、倦怠疲勞し尿は最初淡色、後には暗赤、褐赤、黒赤若くはタール色を呈し蛋白質を含む其の量は初期多量なるも漸次少量を排す通常大熱(四十度乃至四十一度)下痢を以て始まり後肢緊張し腰部を壓すれば知覺過敏にして疼痛を訴へ後体次第に孱弱となり遂に起つ能はず虚脱に陥りて斃るゝに至る

療法 力めて初春の放牧を避け排水耕耘を以て土地を改良し對症療法を行ふべし即ち便秘あれば緩下劑を用ひ下

痢あれば止下劑を處すべし例へば硫酸鐵一五〇乃至二五〇明礬、タンニン酸一五〇乃至二五〇阿片末一〇〇乃至二〇〇若くは阿片丁幾三〇〇乃至六〇〇の如し
 又石炭酸、リゾール各一〇〇酒精、水各五〇〇より成る混和液を毎時一食匙づゝ内服せしむるを宜しとすと云ふ
 豫防法としては毎日二回動物に強食鹽水浴を施すべしとなり

第五章 生殖器病

包皮炎

原因 排尿の際陰莖を包皮外に挺出せざるものに多發し尿液の包皮内部を浸潤刺戟するに因るなり

症候 輕症にありては包皮内部腫脹し重症は包皮内部の肥厚糜爛及び顯著なる腫脹を併發し排尿は困難となり尿液は淋瀝滴下し或は全く排出せられざるを以て疝痛、膀胱膨滿を來すに至る

療法 輕症は微温石鹼水或は水を灌漑し包皮脂を除去し重症は同一の法を行ひ包皮脂を除去したる後、包皮腫脹顯著なる部には亂刺を行ひ糜爛せる部には明礬溶液を灌漑しヨードホルム、タンニン酸を散布し或は鉛軟膏又は酸化亞鉛軟膏を塗布すべし

陰囊の損傷及炎症

原因 轆木衝突、障害物抵觸等によりて本症を發す

症候 陰嚢は充血腫脹し淺創或は深創を有し創傷部の染毒によるものは膿汁を漏らし重症は往々腹膜炎、辜丸炎を發す

療法 患部は防腐消毒を行ひ外科の法則に従ひて施療し陰嚢縋帶を施し染毒を豫防すべし

陰嚢の水腫及血腫

原因 陰嚢水腫、精系水腫、陰嚢血腫は辜丸或は精系の外傷に原因する漿液の分泌或は出血によりて發するものなるを以て辜丸炎或は精系炎に繼發するなり

症候 箝頓せざる陰嚢ヘルニアに類する症狀を呈するも陰嚢殊に其の底部は著しく腫脹し柔軟、無痛、無熱にして彈力を有し陰嚢の上部を壓すれば底部に於て波動を呈し且

つ陰嚢を上部に壓抵するときは含有液は移動するものなり

療法 治療法は陰嚢血腫には陰嚢穿刺法を行ひ水腫には數回穿刺法を試みたる後ルーゴル氏液或はヨード丁幾を陰嚢内に注入すべし注射後二十四時間を経るときは腫脹顯著となるも六乃至八日を経るときは自然に消散するものなり前記の方法を試むるも効なきときは去勢術を行ふべし

子宮炎

原因 本症は損傷、挫傷若くは分娩の際其の救助法の失宜に起因し又胎兒膜の腐敗、寒胃等は之れを誘發す

症候 産後暫時にして患畜は不安の状を呈し体温微しく
 亢進し荐りに後肢の位置を變換し屢々起臥を試み腹部を
 顧りみ以て疼痛あるを訴ふる状を呈す子宮は増温、潮紅、腫
 脹し且つ知覺過敏となり屢々惡臭の粘液を漏らす

療法 急性染毒性子宮炎は初期リゾール〇・五乃至一%、ク
 レオリン〇・五乃至一%を以て子宮内を洗滌し内服薬とし
 て重炭酸ナトリウム、硫酸ナトリウムを用ふ
 單純急性子宮内膜炎は温湯或は粘液煎汁にクレオリン、石
 炭酸等を伍して子宮内を洗滌し内服に硫酸ナトリウム、硝
 酸カリウムを粘汁に混與す
 慢性子宮内膜炎にはリゾール、クレオリン或は明礬、タンニ
 ン酸一%にて洗滌し内服薬として滋養強壯劑を應用すべ

し
 シモン氏は牝馬の敗血性子宮炎にルーゴル氏液(沃度一分、
 沃度加里五分及蒸餾水百分)の子宮灌漑を賞用す

膣炎

原因 本症は特發することあり或は又子宮炎と併發する
 ことありて膣脱に繼發し又難産の際に於ける救助の失宜
 に起因し或は又胎兒膜の久しく殘留して其の腐敗するに
 よりて之れを發することあり

症候 患畜は不安興奮し狂躁の状を呈し頻りに尾を左右
 に掉り後肢を以て地を蹴踏するが如き状を呈す膣粘膜は
 潮紅、腫脹し温熱疼痛ありて初め乾燥するも後に至れば分

泌液増多す

療法 原因療法を主とし産後に發病せるものによりては速かに娩隨を除去しクレオリン、石炭酸或は明礬水を以て子宮を洗滌し發熱著しきときは驅熱薬を應用し疼痛著しきときは鎮痛薬を用ひ尙ほ炎症去らざるときは硫酸亞鉛の如き收斂薬を用ふべし

膣脱

膣脱とは膣の外部に脱出したるものにして之れに全、不全の二種あり

原因 鼓脹症、腹部膨滿、胎兒の壓迫、劇烈なる努責、樞牀の過度の傾斜等なり

症候 不全膣脱即ち膣の反轉して陰門外に達せざるものによりては膣は大小不定の圓形腫脹を呈し黯赤色を帯ぶ全膣脱即ち膣の陰門外に突出せるものに於ては膣は拳大より人頭大に腫脹し圓球形にして粘膜炎は赤色を帯び該腫脹の中央に子宮口を見るべし

療法 豫防法として妊娠獸の後軀を少しく高くして繫留し總て前記原因を除去することに力むべし
不全膣脱は概ね自然に復位するを以て療法の要なきも全膣脱に於ては脱膣部を消毒し著しく腫脹せるものには多量の明礬溶液(二乃至三%)を灌漑し脱膣せる膣の最後部より手を挿入し徐々に之れが整復を試み全く復位せば陰門にデルウァー卜氏繩製壓定縲帶を以て陰門に抵し其の再

出を豫防すべし

子宮脱

子宮脱とは子宮の一部或は全部反轉し脱出せるものなり
原因 本症は牛に最も多く羊、山羊之れに亞ぎ馬、豚、犬又た之れに次ぐ分娩時又は娩隨排出の際に於ける強努責、難産救助の場合に於ける腔又は子宮の損傷に原因す
症候 本症にありても亦全、不全の二種ありて不全子宮脱とは子宮角一部の反轉疊積するものにして長大なる囊腫即ち子宮陰門に突出し反芻獸にありては能く其の表面に盃狀窩を視るを得べし脱出せる子宮は初め淡紅色なるも時間を經過すれば暗赤色となり子宮の表面は乾燥し塵埃

にて被はれ或は糞尿の爲めに汚染せられ損傷を生ずるに至る

全子宮脱とは子宮陰門外に脱出し子宮粘膜露出するものにして脱出せる子宮は牝馬にありては稍々圓錐形を呈し反芻獸にありては垂下して飛關節に至り甚だしきものもありては地上に達することあり

療法 患畜を仰臥或は起立保定を施し後軀を高からしめ三%のクレオリン溶液にて脱出部を洗滌し腫脹顯著なるものには明礬水二%を灌漑し脱出部に損傷或は器質的の變化なきときは整復すべし其の法先づ鹽酸モルヒネ牛に〇・五乃至一・五を皮下注射し或は抱水クロール二五〇乃至四五〇を内服せしめ患畜の努責を豫防し膀胱及直腸を

空虚にし子宮脱部を消毒し終らば陰唇に近き部分より漸次他の脱出せる部を挿入し整復を試むべし而して再發し易きものには種々の壓抵綑帶を施すべし

產褥麻痺 又產褥急痲

原因 本症は從來產褥熱と命名せられしが近時は產褥麻痺又產褥急痲と名づけ產褥熱の病名は産後の熱性症に應用することゝなれり本症は牛に特發し其の原因は未だ明かならざるも營養善良の肥満牛或は勞働不足にして良美の飼料に養はるゝものに多發し又は遽かに飼養法を變換するに起因することあり

症候 産後二三日を経れば患畜俄然食慾を失ひ呻吟苦悶

し頻りに其の後肢の位置を轉換し踰躑として遂に倒臥す胃の作用歇止し腸の蠕動機亦衰ふ脈搏軟小呼吸稍々深長体温昇騰せず常に三十六度を超えず皮温不正にして外耳及四肢は著しく厥冷し眼光瘳惡死に頻すれば眼球陷沒し遂に昏睡の狀に陥りて死す

豫防法 本症にありては治療法の如何よりも寧ろ豫防法を施すを以て優れりとす即ち合理的の飼養法を試み食物の濫與を避け分娩に近づけば飼料を節減し毎日正規の運動を命ずべし

療法 二法あり一つは麻痺を治癒せしむると、一つは腸胃の機能を催進せしむるとにあり腸胃の機能を催進するには硫酸ナトリウム五〇〇〇クロールナトリウム五〇〇の

合劑又は硫酸ナトリウムと硫酸カリウムとの等分を粘漿若くは芳香浸劑に溶解し毎日三回服用せしむ麻痺を治癒せしむるには蕃木髓末三〇〇吐酒石一五〇クロールナトリウム一〇〇〇硫酸ナトリウム五〇〇〇の合劑を六分して其の一分を毎三十分時若くは一時間に與ふ其他石鹼水煙草煎劑の如き刺戟藥を灌腸し而して背部の兩側には刺戟藥を塗布し麻痺の持長せるときは點狀烙鐵を一側に三個宛應用すべし

シユミット氏は産褥麻痺の原因に關し自体中毒説を唱へ其の毒素は子宮内に生ぜずして乳房の初乳球及剝皮せる陳舊の上皮細胞より生ずるものと信し此の意見に基き初乳の構成を制止し且つ既に生ぜる毒物を中和せしむる策

を講じ沃度加里を供用す其の法先づ乳房内の乳を搾取し乳頭は石鹼水にて洗滌しリゾール水を以て消毒し沃度加里七乃至十瓦を新煮水一リットルに溶し攝氏四十度乃至四十二度まで冷却し四個の乳頭内に平等に注入す但し注入には導乳管ミルカパイプ、長さ護謨管及び玻璃漏斗を用ふ但し灌注の際は絶えず乳房を按摩す

博士アロンセン氏は本症の原因を以て血液が乳房に滲中するが爲め生ずる所の腦貧血に歸し十四頭の病牛に一リットル半乃至二リットルの純粹沸煮水又は之に食鹽一茶匙を加はへて乳房に注入しシユミット氏と同様の卓効を收めたりと云ふ又ブレントン氏は本症に對してトリクレソールの効能を唱道す

娩隨停留

原因 本症は胎兒膜排出するに當り障害あるに原因す例へば胎盤の聯接過強にして容易く分離せざるか或は子宮衰弱若くは全身虚脱により胎兒膜の排出せざるが如き之なり

症候 後産即ち胎兒膜は分娩後直ちに排出するを常とするも若し分娩後三日を経過するも排出せざるか或は三週間も停留するときは病的變狀と見做すべし後産三日以上停滯せるときは腐敗分解して惡臭の汚液陰腔より漏出し患者は營養機能衰へ乳量減じ衰弱を來す

療法 患者には生姜末或は桂皮末一〇〇を麥酒一瓶に混

和して内服せしめ或は麥奴、サビナの如きを與へ脱出せる胎兒膜の下端に百五十乃至二百五十の重量物を結着して其の脱出を試むべし若し三日を経るも胎兒膜停滯して脱出せざるときは千倍の昇汞水、五十倍の石炭酸水等を以て局部を洗滌消毒し又術者の手腕をも消毒し且つ油を塗り一手を腔内に挿入して子宮内に達せしめ接合せる胎兒膜を分離せしめ他手を以て徐々に垂下せる膜を挽出すべし胎兒膜の排出する後惡臭液尙ほ漏出するときは過満侷酸加里溶液一乃至三%若くは稀薄なるクロール水を用ふべし而して患者には胡蘿蔔、亞麻仁煎の如き滋養食を給すべし

フアンブレッチ氏は娩隨停留に對し砂糖内服の効あることを報

道せり其の法砂糖半ポンドを適宜赤酒に和して投與し必要あれば六時毎に反覆し娩隨逸出するか又は下痢するに臻りて止む病餘の療法はリゾール溶液を以て子宮を洗滌するにあり

チーム氏は娩隨停留の場合に於て油を灌腸し蓖麻子油五十瓦、甘菜三瓦を與へ良効を奏したりと云ふ

乳房炎

乳房炎は乳房の焮衝を謂ふものにして牛に尤も多く羊馬之に次ぎ犬豚にありては甚だ稀れなり

原因 乳房炎は分娩後或は幼獸を離乳せし後直ちに發するものにして主因は離乳後搾乳を怠るにあり例へば幼獸

斃死せるとき乳汁蓄積し爲めに乳房充血を來し發炎するものなり其他衝突、打撲の如き器械的感作、寒冒等に起因するものなり

症候 乳房表層の炎症にありては單に皮膚赤色を呈し緊張し少しく指壓痕を殘留するも他に異常なく乳汁も亦變化なし然れども乳房内部の炎症の場合には患部腫大し熱痛を帶び漸次硬固となり皮膚は赤色或は帶藍赤色となり乳汁に變化を來し其の分泌量も亦減ずるに至るなり急性乳房炎にありては体温亢進し食慾減退し体表の溫度不定にして一様ならず

療法 原因を除去し患畜には力めて濃厚食を避け清涼淡白の飼料を給し屢々搾乳し患部は初期盛んに冷水を灌漑

し或は鉛糖水を以て冷却せしめ或は鉛軟膏を毎日三回塗布し同時に硫酸ナトリウム二五〇〇乃至五〇〇〇をカミルレ花煎汁に溶解せしめて與へ腫脹硬さときはヨードカリウム軟膏(ヨードカリウム五〇)家猪脂三〇〇)を二回乃至三回患部に貼用し時日を経過するときは冷湯法を禁じて蒸湯法を行ひ劇痛あるときは亞麻仁、ヒヨス葉を以て罌布を施し或はイヒチオール、ロート軟膏を塗布すべし醗膿の場合には亞麻仁罌布を用ゐる疼痛減退するときはカミルレ花巴布又は乾草實巴布を用ゐる已に醗瘍を發せば速かに披鍼を以て之れを截開し硬結せばヨード軟膏或はアムモニア擦劑を貼布し壞疽に陥るときは鉛糖水を用ゐる已に之れを發せば深く切開して出血せしめ芳香浸劑及收斂劑の溶

液を塗布し又は巴布を貼すべし

第六章 眼病

結膜炎

原因 外來の異物、器械的、化學的の刺戟感作、寒胃、眼瞼内反、寄生蟲等に原因し又腺疫、胸疫、牛疫及犬瘟熱の如き傳染病の經過中に繼發することあり

徴候 結膜は潮紅し眼瞼腫起し羞明流涙、疼痛あり最初涙液は漿液性にして後には粘液及膿に變じ結膜囊殊に内眥に蓄積す充血の程度は種々にして一樣ならず時に散蔓性の充血を呈し或は又樹枝狀に充血怒張することあり眼球結膜主として炎症に罹るときは結膜浮腫を呈し結膜は角

膜縁に於て隆起す

療法 原因を除去し患畜を暗厩に移し分泌物少きときは冷罨法(鉛糖又は硼酸水)を施し羞明著しきときは鹽酸コカイン(二—三%)を點眼すべし其他硫酸亞鉛〇・五を蒸餾水五〇・〇に溶解して點眼するか又は硝酸銀〇・一蒸餾水二〇・〇を點眼すべし之れを用ゐるときは直ちに二%食鹽水にて洗滌し過度の刺戟を去るべし慢性症にありては溶性硝酸銀を用ふるか赤降汞又は白降汞軟膏(一、二〇)を用ふ眼瞼内反によるものは手術に據るの外治法なきものなり

膿漏性結膜炎又化膿性結膜炎

原因 單純なる結膜炎の原因は皆本症の原因となる犬に

於ては屢々犬瘟熱の經過中に發す

徵候 本症は單純結膜炎の高度に達したるものにして結膜の潮紅、腫脹及膿樣液の分泌を生ず羞明の狀甚だしく患畜は常に眼瞼を閉し暗所に向つて起立するを好むに至る膿汁は結膜囊に滯留し常に眼瞼に多量を流出す時日を経れば角膜を侵蝕し角膜に甚だしき散蔓性溷濁を生じ角膜は全部乳白色となり或は又角膜の中央に膿瘍の圓形若くは灰白黄色の斑點を見るに至るなり

療法 硼酸水二乃至四%、クレオリン一%、五千倍昇汞水の如き消毒液を以て結膜囊を洗滌し常に膿汁の蓄積を防がざるべからず腫脹過度なれば溫罨法を試み疼痛著しければ鹽酸コカイン(二乃至三%)を點眼し昇汞の噴霧法を行ふ

其の他鉛糖、硝酸銀(〇・五——一%)、硫酸亞鉛一%の如き收斂劑を試むべし

角膜炎

原因 限局性炎は外傷、眼瞼内反、異物の侵入、生石灰、腐蝕藥、刺戟藥の誤用等に原因し、散蔓性炎は結膜炎に續發す

徵候 羞明、流淚、疼痛顯著にして、血管は大に角膜の表面に新生し、角膜は薄く、溷濁し、表面粗糙となる。或は角膜の表面に半透明の斑點を生ずることあり、或は角膜の溷濁は次第に蔓延して全角膜を侵し、種々の狀を呈す。病機亢進すれば、角膜潰瘍、角膜穿孔を生ずるに至る

療法 原因を除去するを尤も必要とす。最初鹽酸コカイン

溶液を點眼し、力めて刺戟症狀を防ぎ、次で硼酸水の溫卷法を行ひ、溷濁尙存するときは甘汞末を吹き込み、又は赤降汞軟膏(一、二〇)白降汞軟膏(一、二〇)を應用す。膿樣滯留すれば五千倍の昇汞水、或は又クレオリン一%を以て洗滌消毒し、硝酸銀、明礬、硫酸亞鉛の如き收斂劑を試み、角膜周擁充血すれば、アトロピンの如き溶液を點眼すべし

角膜潰瘍

原因 本病は犬に屢々發するものにして、犬癩熱の經過中に發するも他家畜に於ては往々化膿性結膜炎、角膜炎の結果本症を發す

徵候 本病は左の三期に分つことを得

第一期にありては羞明流涙、疼痛劇烈にして病機亢進し刺戟症状著しく潰瘍の底面は粗糙となり灰白色を呈し邊緣不正なり

第二期にありては刺戟症状減少し瘍底は平滑となり其の周囲は血管新生し肉芽の發生を促さしむ

第三期は恢復期にして瘍底は平滑となり肉芽組織は瘍面を充填し肉芽組織は漸次收縮して癬痕を結び血管を失して透明となることあり或は又バンヌスを形成することあり

療法 第一期にありては硼酸水(二—四%)を以て冷罨法を行ひ鹽酸コカインを點眼し刺戟症状を去り硝酸銀の點眼を行ふ第二期にありては麻醉藥、防腐藥を應用し溫罨法を

行ふ第三期には肉芽の發生を促す爲に溫罨法を行ひ硫酸亞鉛又は硝酸銀溶液を點眼し血管消退せざるときは甘汞末を吹き込むべし

角膜翳

原因 角膜組織欠損、角膜潰瘍等に由て生ずる癬痕或は角膜組織中に鹽類の沈着するによる

症候 羞明流涙なく血管を欠除し刺戟性の症状を呈せざるを以て炎性による溷濁と區別することを得るなり而して視覺の障害は主として溷濁の位置及濃薄の程度による溷濁發生の後日尙ほ淺くして刺戟症状存するものにては消散の望みあるも潰瘍より生じたる溷濁は消散頗る

困難なり

療法 血行及吸收の催進は本症療法の主眼なるを以て冷濕布を眼に纏ひて濕罨法を試むべし甘汞、赤降汞、黃降汞、軟膏(一、二〇)每一回米粒大宛塗布すべし或は又甘汞末を吹き入るゝかヨードカリウム軟膏を應用すべし

月盲又定期性(間歇性)眼炎

原因 本病は虹彩及脈絡膜の廻歸性炎症にして馬に多發す其の原因は從來遺傳、氣候、土壤或は食物の關係ありと稱せるも未だ明かならず又た近時の研究に據りて本症の傳染性を帶ぶるは疑なきが如しと雖ども傳染毒の性状、侵入の經路等に抵りては諸家説を異にして未だ一定せず

徴候

初期より羞明流淚あり結膜は充血腫起し眼瞼亦僅かに腫起す患畜は眼瞼を閉鎖し瞳孔縮少す病勢進めば水様液黄色を呈して渾濁し瞳孔は糸の如く甚だ縮小す虹彩は滲出物を以て被はれ帶綠灰白色に變ず角膜溷濁を來す此の期を過ぐれば諸徴漸次消散するに至る本症の再發は一定の期なく初回の症狀消散せざるに第二次の襲來を見ることあり或は又三四週の後に再發するものあり而して再三再四發病の後或は白內障、黒內障若くは綠內障に陥り視覺を失ふて止む

療法 古來種々の療法を試みたるも一として治癒せしものあるを聞かず病畜は暗厩に移し飼料を減じ各種の刺戟を避くべし本症療法の要旨は發作の經過をして可及的佳

良ならしめ諸種の有害的變狀を防ぐにあり虹彩癒着を防ぐ爲めには一—二%のアトロピンを點眼し眼内滲出物の吸収を促す爲めにヨードカリウムの内服及硼酸水の温罨法を行ふべし
本症に罹れるものは種畜に供すべからず

第七章 運動器病

筋肉痠麻質斯

原因 本症は馬及び牛に最も多く羊豚にも亦稀れならず寒胃は其の主因にして冷濕の天氣、寒風、賊風、構造不良の厩舎、卑濕沮洳の牧場、發汗後急遽の身体冷却杯は之れを誘發す

徵候 馬に於ける症候、本病の特徴は病機の一處より他處に遊走轉移すると、恢復後再發し易さと、運動せしむれば跛行輕減し或は全く消散するにあり患脚は突然緊張し步履強拘となり体重を患肢に支ふること能はず歩武短小にして關節を屈せず患部の筋は硬く腫脹し疼痛を帯び往々其の周圍に浮腫を發す筋肉痠麻質斯汎發すれば四十度乃至四十一度の熱を發し脈搏、呼吸増加す若し一處に局限するときは熱候を欠き脈搏少しく疾速となるのみなり
牛に於ける症候、略ぼ馬に同じく肩及腰を侵し或は一肢の筋を襲ひ或は身体の諸筋を襲ふ患部の筋は緊張疼痛を帯び全身強拘となり肢を屈すること能はざるに至る
犬に於ける症候、専ら頸背腰筋に發し全身を侵すもの亦稀

れならず病犬の叫鳴は其の主徴にして身体に觸るれば大に疼痛を訴へ運動は強拘緊張、常に伏臥し起立又は進行すること能はず
 羊に於ける症候、患羊は步履強拘、往々十字跛行の状を呈し頭と頸とを側傾し力めて運動を避け常に伏臥せり
 豚に於ける症候、肢脚強拘にして歩行疼痛を訴へ往々後体の痿弱を貽こす

療法 患者は温厩に入れて温覆安静にし飼料を減じ淡白易化の飼料を與ふべし限局せるものには患部に刺戟擦劑例へば樟腦精若くは樟腦精とテレピン油(テレピン油一、樟腦精一〇)又は芥子精(八——一〇%)を塗布し盛んに摩擦し或は又ブリースニツ氏の蒸湯法を試むべし慢性頑固

の僂麻質斯にありてはベラトリン〇〇五乃至〇〇一を酒精二〇に溶解し馬に皮下注射す日々一仙瓦宛を加へ四乃至五日毎に休薬す全身の僂麻質斯にありてはザリチール酸又はザリチール酸ナトリウムを内服せしめ其の量牛馬には二五〇乃至五〇〇犬羊豚には一日量二乃至八〇なりとす即ちザリチール酸ナトリウム一〇〇〇甘草根末二五〇アルテア根末、水各適宜を祇劑となし毎三時三分一を馬に與へザリチール酸ナトリウム五〇〇蒸餾水一〇〇〇を毎時一食匙宛犬豚に與ふ

關節僂麻質斯

原因 本症の主因は傳染毒にして寒冒は其の素因となる

に過ぎざるなり

徴候 關節の腫脹を以て主要の徴となす就中腕節、飛節、球節は特に侵され易きなり該腫脹は熱痛を帯びて緊張し歩行せしむれば大に趁跛し骨折にあらざるやを疑はしむ病畜は絶えず側臥し往々呻吟咬牙し起立運歩を欲せず体温は一乃至二度増し脈は硬小にして一分時に七十乃至九十を算す食欲欠損、反芻不振、通便遲滯して漸々瘦削す

療法 豫防法を專要とし力めて寒胃を避け牛にありては夙に娩隨を除去し十分に子宮を消毒すべし醫藥としてはザリチール酸及ザリチール酸ナトリウムを用ふべし即ち牛馬に一日量一〇〇〇乃至一五〇〇犬及豚二乃至八〇〇又關節滲出物の吸収と傳染毒の排泄を促す目的を以て吐酒

石、重炭酸ナトリウム、硫酸ナトリウムの如き緩下劑を投ずべし外用は急性期にありては關節の周圍に石炭酸軟膏、イヒチオール軟膏(一、二〇)又は樟腦軟膏(一、二〇)を塗擦し慢性症にありてはヨード丁幾、カンタリス軟膏或は又ヨードカリウム一〇ヨード丁幾五滴家猪脂一〇〇を塗擦し運動を禁じ温包して通氣良好なる温厩に繋ぐを肝要とす

骨軟症

原因 本症は成長獸に於て石灰鹽類吸收の爲め其の發育せる骨の再び軟化するものと言ふものにして石灰分に乏しき土壤、飼料并に飲料水、變敗の食、醱酵し易き牧草、不良の厩舎、寒胃等に原因す

徴候 病初は唯だ輕易の消化不良と異物嗜好を現はすのみにして外部より認め得べき病徴なし病勢大に亢進すれば顔面骨の腫脹を來し咀嚼困難となり四肢は歩様強拘歩武短小にして疼痛あるものの如く肢脚を開張す重症は趁跛し數多の關節腫脹し大に熱痛を帯び骨端亦著しく腫脹するに至る食慾は常に異ならずして糞塊は小さく且つ硬くして粘液を蒙り不消化物を混じ酸性の反應を呈す尿は時に中性又は亞爾加里性なるも多くは酸性の反應を呈し透明又は琥珀色を呈す比重は低く一・〇一九乃至一・〇二八に下る營養は漸次不良に陥り瘦削日に加はり毛皮粗剛、食思欠損遂に惡液質に陥りて斃る

療法 豫防法として可及的飼養管理に注意すべし其他生

活状態に於ける急變を避け日に適度の運動を命じ主として青草、胡蘿蔔、良乾草の如き淡白易化の飼料を與へ初期放牧して病機の増進を防ぐべし
療法としては飼料を一變して其の品質を改良し石灰鹽類に富める食餌を給すべし
内服薬としては未だ奏効確實なるものなく唯だ姑息の目的にしてブルリヒ氏鹽(ブルリヒ氏鹽は一分の食鹽と二分の重碳酸曹達との混合物にして馬には一日二、三回食物に混じ毎回一食匙を與ふ)人工カル、ス泉鹽、芳香苦味薬及蕃木髓末を處し燐酸石灰を食餌に混じ或は燐、肝油の合劑を連用すべし例へば牛馬に燐(〇〇)五肝油三六〇(〇)を溶液となし毎日一食匙宛用ゐる或は又沈降炭酸カルシウム、沈降燐

酸カルシウム各二〇〇〇を散劑となし毎飼料に一食匙宛
混じて與ふ

佝僂病

本病は純然たる幼年病にして幼稚の豚犬に多く子馬、犢に
は稀れなり原因は營養物中石灰分の不足を主因とす即ち
石灰に乏しき乳汁、庖廚の殘渣、馬鈴薯單味の如き滋養分は
本病を發す

徵候 豚は步履強拘にして歩行に困難を來し飛節、腕節、球
節は腫脹隆起し疼痛を訴へ晚期に至れば骨の彎曲を來し
食慾を失ひ羸瘦下痢し不斷伏臥す
犬は骨端隆起し肋骨の念珠狀腫脹、肢骨の彎曲を主徵とす

馬は發育不良にして輕役に服すれば疲勞し易く肢骨の骨
端并に頭骨の隆起を來す飛節、腕節は腫脹し些々たる原因
により骨折を發し易し

牛は飛節、腕節は著しく腫脹し背及肢骨の彎曲、肋骨の念珠
狀腫脹歩行の困難を來し患畜は不斷伏臥呻吟して苦痛を
訴ふ

療法 大体骨軟症と同じく石灰分の供給を必要とす食物
は可及的一變し過食を禁じ胃腸病あれば先づ之れを治し
患畜は舍外に放ちて運動せしめ馬には燐〇・二五乃至〇・五
を肝油三〇〇〇に溶解して日々一食匙宛穀粥に混じて與
へ犬、豚には燐〇・〇三を肝油三〇〇〇に溶解して日々一食
匙宛を與ふべし

腱炎及腱鞘炎

原因 本症は主として管部淺屈腱、深屈腱及繫鞅帶に發するものにして其の原因は長日月間の休止、負擔の増量、急速なる歩度或は挫傷等は本症の誘因となり或は轉捩、捫挫等より發す

徵候 患肢の屈曲自由ならず歩行せしむれば跛行を呈す跛行は損傷の部位及輕重の如何により之れを異にし穿屈腱の器械的損傷によるもの尤も顯著にして被穿屈腱によるものは輕微なり跛行は支跛にして球節を伸張し或は回轉するも少しも疼痛なし患部は溫熱腫脹し之れを壓すれば知覺過敏にして疼痛を訴へ腫脹は初期に於て柔軟にし

て散蔓性を帯び末期に至れば硬固となる患畜は休止するの際常に患肢を腹屈す

療法 病馬には休憩を命じ蹄鐵を除去し初期患部に熱あるときは冷水又は明礬一〇〇〇醋酸鉛二〇〇〇を水五リトルに溶解して冷湯し奏効なき時は蒸湯法を行ふべし即ち先づ患部を清潔にし濕潤の麻織糸を患部に巻き其上を油紙にて被ひ後に壓迫繃帶を施し四時間毎に麻織糸を交換すべし時日を経て疼痛消失すれば按摩術を行ふべし腫脹疼痛去らざれば四三一合劑水銀軟膏を塗擦し尙ほ効なくんば發泡劑を塗擦し後ち滲出液なきに至れば濕潤の麻織糸を以て腱の兩側に巻き後ち油紙にて被ひ壓迫繃帶を施し二、三日間を経て麻織糸を交換し五、六日間放置す

べし

肩胛關節挫傷及轉振

原因 本症は稀有なれども滑走或は轉倒に基く過劇の外轉、内轉或は回轉運動に由りて起ることあり

徴候 患部は溫熱、疼痛を帯び腫脹を呈し起立に於ては患肢は外轉姿勢を呈し負重を厭ひて蹄尖を著地す歩行せしむれば運歩緩慢にして歩幅短縮し患肢は懸跛を呈し常に外轉姿勢を示し蹄尖を地に觸るゝを見るなり

療法 患畜は安靜にし急性症は絶えず冷水又は鉛糖水を以て冷湯し次でブリースニツ氏巻法を施し樟腦精一五〇・〇テレピン油六〇・〇アムモニア水三〇・〇酒精七二〇・〇の合劑

を患部の周圍に塗布すべし

肩胛關節炎

原因 創傷、挫傷、打撲、衝突、轉倒等に原因し慢性症は脱臼、轉振或は痲痺質斯に基くことあり

症候 肩跛行の項を參考すべし

療法 患畜には絶對的休止を命じ急性症の場合には冷湯法次に毳布を外用し刺戟藥、發泡藥を應用し或は又串線打膿法を試むべし

肩跛行

原因 挫傷、衝突、堅硬地の轉倒、肩胛部の動搖等に起因す

徴候 運動時に於ては懸跛を呈し運歩緩慢にして歩幅短縮し患肢は充分に舉上せらるゝことなくして蹄尖を地に觸るゝを見る環狀運動をなすときは跛行尤も顯著となり患肢は前進の際、外轉姿勢を呈し跛行は堅地よりも軟地に於て明瞭となり殊に乳頭膊筋其他肩胛舉筋の疾病を有するものの速歩時に於て然るなり又患畜を退却せしむるときは患肢は主として舉上せらるることなく地上に觸れて後退するなり而して前膊舉筋に疾病あれば故意に患肢を前方、後方、内方、外方に運動せしむれば顯著なる疼痛を訴ふ凡て肩跛行は坂路を昇らしむれば趁跛更に甚だしく就中肩胛僂麻質斯に基くものは久く行歩せしむれば趁跛大に輕減し又た好晴溫暖の天候にありては跛行輕快し陰濕寒

冷の日は之れに反す要するに肩跛行に於ては肩胛部に附近の診査精細なるべきは言ふまでもなく試みに蹄をも検査して其部に疾患の有るや無きやを確むべし

療法 急性炎症なれば患畜を絶對的に休止せしめ初期は冷湯又は冷氈布を施し五乃至六日にして跛行消散せざるときは四三一合劑を一日一回宛三日間連用し尙ほ効なくんばテレピン油を外用し或は串線打膿法ベラトリンの皮下注射を行ふべし而して僂麻質斯に原因するものにはプリースニツ氏蒸湯法とベラトリンの皮下注射を併用すれば効あり

肘關節炎

原因 咬噬、蹴踢或は打撲に原因するなり

症候 發病の初期にありては患肢は負重に堪ゆるも運動の際劇烈なる疼痛を發し關節部の運動を避くるの狀を呈す時日を経るに従ひ患部は増温、腫脹、疼痛顯著となるものなり

療法 豫防法尤も必要にして發病後は外科の通則に従ひて處置すべし

肘腫

肘腫とは肘頭部に生ずる腫物にして鐵尾の衝壓に原因する肘部の挫傷に主因するものなり故に體質の尪弱、短かき絆綱、狹隘の厩舎等は常に牛臥姿勢をなさしむるにより本

病症を發す

症候 肘部は腫脹し之れに觸るれば柔軟にして微痛及増温を呈し時日を経過すれば硬結を來す而して肘腫は跛行を呈すること頗る稀れなり

療法 新鮮の腫脹は氷水又は鉛糖水を以て冷湯し赤色沃度汞一〇%を二乃至三日間患部に塗擦すべし若し化膿するに至れば之れを切開し烙鐵穿刺法を行ひ排膿後腐蝕藥を應用すべし

冠 膝

冠膝とは膝關節前面の挫傷にして運動時に於て蹉躓轉倒し前膝部を地上殊に石礫多き硬地に衝壓するにより發す

症候 通常皮膚の挫潰を伴ひ周圍は腫起し温熱、疼痛を呈す輕症は跛行せざるも重症にして化膿するに至れば跛行を來すに至る

療法 皮膚の挫傷は患部を洗潔にしワゼリン、水銀軟膏或はヨード丁幾を塗擦し壓迫繃帯を施し皮膚の穿創には防腐療法を行ひ壓迫繃帯を施すべし
創傷面長く癒えずして殊に腐膿を醸もするに臻れば沒藥丁幾と蘆薈丁幾の等分を適宜應用せば卓効あり尙ほ沃度丁幾を以て其の一に代ふるも可なり但し此の療法は常に冠膝に限らず斯類の他症に施して頗る妙なり

管骨瘤

原因 本症は骨膜炎の結果骨質腫脹し腫脹部は化骨し骨瘤となるものにして骨膜炎の原因は打撲、衝突、裝鐵失宜、過劇の勞働、不正地に於ける運動等なり

症候 跛行は患部の位置、大小及び病機の輕重其の他作業の種類によりて其の状態一様ならざれども後管骨瘤に於て尤も顯著なり運動時に於ては懸跛及外轉姿勢を呈す殊に軟地に比し硬地に於て然るなり而して跛行は骨膜炎に原因するにより骨膜炎の癒ゆると共に跛行消失するも原因持續すれば頑固の跛行を呈し其の結果長圓形の大骨瘤を生ずるに至るなり

療法 患畜には休止を命じ蹄鐵を改装し合理的の裝蹄をなし患肢諸關節の負重を平等ならしむべし醫藥は昇汞一

分を酒精四分に溶解せしめ羽毛を以て之れを患部に塗擦し或は烙鐵を施すべし而して前記の方法を試みるも効なければ骨膜剝離術或は按摩術或は壓迫繃帶を行ふの外施すべき療法なし本症に罹れるものは種畜に供用せざるを宜しとす

指關節の轉捩

原因 關節の構造不良なるもの又肢勢の不良なるものは素因となり誘因は不良の道路、裝蹄の失宜等に因する轉倒、滑走其他起立時に於ける不慮の損傷等なり

症候 本症にありては跛行頓發し患畜は起立時に於て患肢に由りて負重をなすを厭ひ指骨を腹屈す而して跛行は

懸跛及支跛を呈し殊に回轉運動せしむれば跛行顯著となる患部は多少溫熱腫脹し壓すれば疼痛を訴ふ

療法 患畜には休止を命じ初期三日間は冷湯法を施し効なければ蒸湯法を行ひ炎症減退したる後ち顯著なる腫脹存在すればカンタリス軟膏又は赤色沃度汞軟膏を塗擦すべし頑固にして効を見ざるときは蒸湯法及壓迫繃帶を施したる後ち發泡劑を應用し同一の療法を反覆すべし

種子骨跛行

原因 本症は屈髓の緊張又は種子骨に對する屈髓の増壓に主因す

症候 此の病に罹れば常に患肢を休止せしめ指骨を腹屈

し對側の健肢によりて負重し運動の際は支跛を呈す跛行は軟地よりも硬地に於て比較的著しく而して運動を持続すれば却て軽減或は消散す然れども劇役後は増進するものなり患部は増温腫脹し之れを壓すれば疼痛を訴ふ

療法 患畜に休止を命じ急性炎の場合には球節及び其の上部に細帶を纏絡し蒸湯法を施し疼痛著しきときは冷湯法を行ふべし慢性症のものには正中神經切斷術を施し跛行を除去するより外なきなり

舩囊炎

原因 未詳にして蹄形は至大の關係を有し前肢の舟狀骨、穿屈腱及指滑車粘液囊互に相前後して發病するを以て障

害飛越、躍乘、伸暢速歩、滑走其他硬地に於ける運動等に主因するものならんといふ

症候 本症は徐々に發するを常とし跛行は支跛にして劇動後増進し長時日休止すれば軽減し或は消散することあり而して跛行の程度は軟地に比し硬地に於て著明となる然れども一前肢罹病せるものによりては運動を持続するに従ひて漸次輕快或は消散し運動時に於て患肢は歩幅短縮し蹄著地の際屈腱の負重を避けんがため前踏姿勢を呈し繫骨を腹屈起繫し蹄踵を地に着けざるなり而して時日を経れば蹄は變形し患肢は負重する能はざるを以て蹄の血行異常を來し蹄又は萎縮し蹄は窄蹄となり繫骨は愈々峻立し蹄底は愈々上方に凸彎するに至るなり

療法 合理的の装蹄法を行ひ初期二週間は冷湯法を行ひ尙ほ効なくんば蹄又串線法を行ふべし

躓跛行

原因 本症は種々の原因によりて發するも其の主要なる原因は轉倒、衝突、蹴踢、過劇の勞働等に基くなり

症候 躓關節疾病に基く跛行は支跛なるも他の疾病に原因するものは懸跛を呈し運歩緩慢にして歩幅短縮し運動時に於て患肢は強梗となり常に蹄尖を地に觸るゝを見る懸跛、支跛何れの場合にも廻轉運動又は退却運動を命ずるときは跛行顯著となる而して此の跛行は時として運動の初期にありて尤も明瞭となり運動を持続するに従ひて減

退し或は増加するなり

療法 患畜には絶對的の休止を命し炎症の微あれば冷湯を行ひ運動と共に減退する跛行特別の原因によるに非らずして隨時再發するものには蒸湯後テレピン油、樟腦精、アムモニア擦劑を塗擦し溫暖なる舍外に繋留すべし若し十二三日を経過するも効なきときはカンタリス軟膏或は赤色沃度(一、八)を應用し尙ほ奏効せざるときはペラトリンの皮下注射、烙鐵、串線打膿法を試むべし

飛節内腫

原因 飛節の構造不良、後肢の構造不良は素因となり器械的損傷、疾驅、重貨の輓曳、挫傷等は之れが誘因となる

症候 本症は馬に多發するものにして初期は只た僅易の跛行を呈するのみにして往々診斷に苦む運動時に於ては支跛懸跛明了となり患肢の伸長不充分にして歩幅短縮す患肢は外轉姿勢を呈し蹄地を離るゝや患肢は直ちに急激に前方に曳る此の歩様は運動の初期及小廻轉運動時に於て尤も明瞭なり

療法 本症にありては根治的療法は望み難し初期熱候存するときは冷湯法を行ひ跛行増進し腫脹を呈するときは解凝軟膏を施す後に至ればカンタリス軟膏、昇汞軟膏の如きを用ゐる頑固の症には烙鐵又はスバット手術を施すべし

飛節外腫

原因 跗前骨頭部の大なるものは本症の素因となり蹴踢或は他飛節外側に於ける損傷は本症の誘因となる

徴候 患畜は跛行を呈し飛節は飛節内腫に於けるが如く運動の際左右に動搖するものなり

療法 患畜には休憩を命じ局部には昇汞軟膏、赤複沃度汞軟膏、カンタリス軟膏の如き強發泡藥を塗れば跛行消退す

飛節後腫

原因 劇烈なる勞働殊に關節發育の完備せざる幼馬の劇役、駢歩の俄然停止、及靱帶の急伸等に原因す

症候 運動時に於て球節を背屈し顯著なる支跛或は飛節内腫に類する跛行を呈す局部を觸診すれば溫熱疼痛あり

然れども炎症の徴候は外傷より發するものの外は甚だ緩慢にして判然たらざるなり慢性に移れば跛行を呈せず
療法 最初急性炎症ある間は冷湯し解凝軟膏を塗布し後に至ればカンタリス軟膏、昇汞軟膏、赤複沃度汞軟膏を塗布し或は烙鐵を試むべし

鞍 傷

原因 体格上罹病の素因を有するものあるも多くは鞍の構造不良、裝鞍法の失宜或は乗御法の失當に因る
症候 背部に鳩卵大乃至鶏卵大の腫脹を生じ該腫脹は硬固増温、皮膚緊張し境界判然、疼痛を有し大なるは扁平狀を呈し小なるものは隆起す患部は癢痒あるを以て患畜は之

れを摩擦し或は咬むに至る

療法 腫脹を伴はざる皮膚の剝離は清潔法を嚴行しヨードフォルム、タンニン酸ワゼリンを塗布し新鮮の皮膚腫脹には厚き布片を以て該部に貼し盛んに冷水を灌漑するか又は氷嚢を用ゐて冷湯し久しきを經過せるものは蒸湯法を行ふべし冷湯及蒸湯法を行ふに當り軽度の壓力或は按摩術を施すは炎症滲出物の吸収を催すに効あるを以て必ず併用を忘るべからず皮下織の溢血及血液滲出を併發するものは冷湯法を行ひ皮膚の損傷大なるものには濕温を施し千倍の昇汞水を灌漑し皮膚創傷微、血腫小にして化膿せざるものは昇汞軟膏(一、二〇)カンタリス軟膏(一、六)を外
 用すべし

第八章 蹄病

蹄血斑 又挫腫

原因 蹄皮膚の挫腫若くは牽引を起すべき各器械的暴力は蹄皮膚の破綻乃ち蹄血斑を惹起す之れが素因は繋の長くして軟弱なるもの前肢肢勢の失格、弱蹄蹄或は蹄踵壁の過度に狭きものにして外因は主として裝蹄失宜にあり

徴候 蹄を削截すれば蹄踵壁、蹄支及蹄底角の下部に暗赤色斑を呈し其の大き針頭大よりペンニ大に達す疼痛の程度は變狀に従ひて一樣ならず概ね輕微の疼痛を呈するも亦欠如するもの多し炎症起れば忽ち劇痛を訴へ蹄踵及蹄球著しく増温し針子を以て局部を壓迫すれば疼痛顯著

なり多くの場合にありては手を以て蹄踵を壓するも已に疼痛を示すものあり

療法 すべて裝蹄失宜を避くるは蹄血斑の豫防并に療法上尤も必要なることなり疼痛烈しく出血多きものには蹄鐵を除去し消炎の爲めに冷湯して化膿を豫防し若し化膿するに至れば膿排去の目的を以て排泄孔を設け千倍昇汞水、三%石炭酸水にて洗滌消毒し繃帶を施すべし

釘傷

原因 裝蹄の際に於ける下釘の失宜に因る

症候 主要の徴候は蹄の増温、管骨動脈脈搏の亢進にして跛行は特に蹄の負重に當り疼痛を訴へ軟地よりも硬地に

於て顯著なり蹄鉗子を以て壓迫するか或は釘頭を叩打すれば疼痛を訴へ患肢を攣縮す通常裝蹄後直ちに起れば通常裝蹄の失宜に原因す釘を抜去すれば蹄尖血に染み或は蹄孔より血液を滴下することあり又た蹄尖の知覺部近傍に達し角壁と共に知覺部を壓迫するものあり此の如きは下釘後通例二、三日にして初めて之れを知る罕れには十日前後に漸く識ることあり

療法 先づ釘及蹄鐵を除去し消毒液を用て患部を洗滌消毒したる後ち更に充分消毒脚浴を施し木タール又はテレピン油を以て釘孔を填充すべし化膿するに至れば損傷部の角質を薄削し力めて消毒を勵行し分泌物の排泄に注意し穿孔部には蠟、黃蠟或は木タールを以て填塞し壓定繃帶

を施すべし

凡て蹄下面の創傷は極めて病毒を吸收し易く些々なる輕傷も輒もすれば強直症の如き重患を繼發し爲めに動物を斃すの虞あるを以て患部の消毒には細心致意せざるべからず

踏 創

原因 踏創は蹄軟部に釘、竹本片等の刺入に原因す

療法 速かに異物を除去し創傷を充分に消毒し爾後の染毒を豫防すべし重症にありては患部の角質を漏斗形に切開し二%石炭酸千倍の昇汞溶液を以て其の部を洗滌消毒し次に探子を以て創傷の深淺廣狹を検し消毒溶液に浸漬せる壓迫繃帶を施し絶えず濕潤ならしむるべし而して創

傷分泌出血液の滲漏少きときは繃帯を變換する必要なきも分泌出血液多量なるときは屢々繃帯を變換し其の都度消毒液にて創口を洗滌消毒すべし若し化膿するに至れば速かに繃帯を解脱し創液の排泄を計り患部周囲の角質を截削しクロール亞鉛(一〇%)に浸せる麻織糸を抵して壓定濕潤繃帯を施し且つ絶えず昇汞水を灌漑すべし

蹄冠躡傷

原因 蹄冠躡傷とは蹄冠部に於ける創傷の總名にして他馬若くは自個他肢の踏躡に基く且つ器械的暴力に因るものも亦た之れに入る

療法 先づ創傷部の毛か剪去し創中に多少存する異物を除去し創傷の下部にある角壁を薄削す次で千倍昇汞水、石

炭酸水、クレオリン水を以て創傷及其の周囲のみならず蹄及繫部をも洗滌消毒し創面にヨードホルム又はヨードホルム、タンニンの合劑を撒布し欠損大なれば昇汞及石炭酸或はザリチール酸綿を創上に抵て繃帯を施し絶えず昇汞、石炭酸又はクレオリン溶液を灌漑して繃帯を濕すべし翌日に至り繃帯創液に染まず疼痛増進することなくんば繃帯は其まゝ放置して可なるも若し之れに反せば繃帯を交換し更らに消毒を行ふべし

蹄軟骨瘦

原因 本症は續發症にして軟骨周圍組織のフレグモトネを發すべき諸多の影響は悉くは症の原因となる蹄冠に於ける單純の創傷は稀れに本症を發す

徴候 フレグモリー性軟骨周圍組織炎を發すれば蹄冠及蹄球部に多少著しき腫脹を呈す腫脹は初め硬固なるも數月の後膿瘍に變し血液を混ざる膿を滿らす次で肉芽發育整然し腫脹減退すると同時に化膿亦衰へ終には小瘻孔を貼し之れより少量の膿を排泄す瘻管の深部に探子を挿入すれば硬き物体に觸るゝことあり(蹄骨或は蹄軟骨)一般に瘻管の存在は本症の尤も確實なる徴候となる

療法 豫防法を尤も緊要なりとす蹄冠部に創傷を發したる場合には病毒の侵入を防ぎ又滲出物の排泄に注意し患部を消毒し以てフレグモリーネ及軟骨瘻の發生を防ぐべし消毒は尤も有力の豫防法なり己にフレグモリーネ蹄冠部下結締織又は軟骨周圍組織に生ずれば濕温を加へて蹄を軟

化し炎症組織に於ける壓迫を去り以て壞疽に陥るを防ぐべし目的を達せざれば防腐液の脚浴若くは琶布を貼すべし日に膿瘍を生ずれば瘻管の發生に注目せざるべからず膿瘍を生ずれば之れを切開し一〇%のクロール亞鉛液を以て洗滌し昇汞水を注射し繃帯を裝し日々三、四回昇汞水を以て繃帯を濕すべし瘻管を發せば收斂防腐液を瘻管に應用す例へばピラット氏液一〇乃至一五%の硫酸銅液を用ふ又一〇%昇汞酒精溶液、石炭酸酒精溶液を賞用す消毒防腐液は瘻管底に達せざるべからず此の目的には先づ表面を洗滌清潔にしたる後に腫脹部に一樣の壓迫を加へて膿の排出を計り一乃至二%石炭酸水、千倍の昇汞水にて瘻管内に注入しつゝ壓迫を加へて排膿し排膿全く終れば防腐

收斂の藥液を注入し其の流出を防がん爲め瘻孔にコロチ
ウムを塗布す三、四日同法を反覆し疼痛腫脹増加すれば炎
症の蔓延を示せるにより之れを止め急性炎消失し膿瘍を
生ずるを待ちて再び前法を反覆すべし此の療法により數
日にして腫脹減退し化膿輕減するか若くは全く消失し八
日乃至十四日の間に徴候再歸せざれば治癒せしものと見
て可なり

蹄球炎

原因 蹄球炎は専ら外傷、挫傷其の他外來の暴力によりて
發するものとす例へば不裝蹄馬若くは過短の蹄鐵を裝し
不平坦の道路、堅き地盤に使役せらるゝ時に發す又低き蹄
腫を有するものは本症を發し易し

徴候 患側に於ける蹄球部の腫脹、増温及疼痛を來す時と
して蹄球は直接外來の暴力により或は浸潤性炎症の爲め
分離を來すことあり

療法 原因を除去し患畜には休憩を命じ蹄球部の創傷な
ければ冷脚或は冷湯を行ひ蹄球部の創傷を存せば其の分
離せる部を除去し洗滌消毒し軽く壓迫繃帶を施すべし若
し患部蹄冠に亘れば其の部の角壁を薄削し以て腫大せる
軟部の壓迫を去るべし壞疽片は刀若くは剪刀を以て截除
すべし

蹄葉炎又蹄炎

原因 内因に屬するものは蹄形の異常、蹄皮膚膜に於ける持

久性器械的刺戟、馬の体重、營養を不良ならしむる諸多の原因等にして、外因は寒冷の感作と飼料の失宜にあり

症候 本症を發せば、特異の跛行を呈し、患馬は蹄尖壁を脱重せんと勉む、尤も頻發するは兩前肢なり、兩前肢病に罹れば、肢をなるべく前方に出して歩行し、苦悶の狀を訴へ、歩尺短縮し、急に後肢を踵進せんとす、起立時并に運動時を問はず、肢は常に常肢勢より遙かに前方に踏着す、稀れに後肢のみ侵さるゝことあり、然るときは全四肢を腹下に集め、頭及頸を著しく下垂し、可成の重心點を前肢に近づけんとす、若し四肢悉く侵さる時は、歩尺短かく、且つ強拘にして、間々呻吟し、踏踏として前進す、疼痛は運動中輕快することなく、却て愈々増進し、終に一步も進むこと能はずして、横臥するに

至る

以上の症狀は一般に本症を確診することを得るも、次の症候に充分注意するを要す

第一、蹄尖の症候中、重要なものを列擧すれば、左の如し

- 1 全蹄殊に蹄尖壁に於ける溫度の増進
- 2 檢蹄器を以て蹄尖及側壁部を壓迫すれば、疼痛を訴ふ

- 3 蹄管動脈及繫骨動脈の顯著なる搏動

第二、多少劇度の發熱 發熱は常に急性蹄葉炎に伴ふ所の徵候にして、攝氏三十九度乃至四十度に至り、皮溫不正、脈搏、呼吸共に充進す

凡そ飼養失宜に因りて起りしものを除くの外、本症固有の

症状は馬匹の劇痛と熱候あるに關せず食慾に異常なきにあり

療法 急性蹄葉炎の治療上尤も注意すべきは蹄の炎症、蹄骨轉位及合併症にあり

急性蹄葉炎を治療するに當りては刺絡を以て最要旨とす而して刺絡によりて効果を得んと欲せば充分放血するにあり瀉血量は馬匹の大きさ、体重、營養状態等に從ひて二乃至三キログラムとす第二の要旨は寒冷の應用適切なるにあり冷水脚浴、冷水又は冷罨法、冷水灌漑法等を用ふ冷湯法は初期にありては日夜續行すべし而して皮膚に刺戟薬を塗布し全身を温覆し硫酸ナトリウム、蘆薈の如き下劑を投じて腸の誘導法を行ふべしフリス氏は鹽酸ピロカルピン(〇

三—〇・五)を用ゐて良効を奏したり劇痛には鹽酸モルヒネを皮下に注射す

攝生には尤も注意を加へざるべからず全營養物質或は強き營養品の禁止は治療上主なる要件にして最初兩日にありては少量の乾草第三日に穀、糠を與へ八日を経ざれば決して穀食を給すべからず之れに反し微温湯は絶えず飲用せしむべし第二要旨は温度適宜にして通氣善良なる厩舎に敷藁を多量に入れ馬をして可成的横臥せしむべし然れども横臥久しきに至れば蹄骨の下降を來し易きを以て臥床を充分軟かにし以て其の害を防がざるべからず

蹄 痛

原因 蹄皮膚組織の特異性は本症の素因となり外傷は屢々本病發生の誘因となる又蹄又の腐爛は蹄又の崩壊を來し肉又をして外界の有害作用に感受し易からしむるを以て本症を誘發し易し

徵候 本症は初期の變狀著しからずして通常蹄又の一部屢々蹄又尖及蹄又側溝の近傍に小隆起を生じ其の尖端は乾燥し基部は灰白色惡臭の分泌物を見る肉又より増殖する物質は纖維組織にして蹄又乳嘴屢々十倍以上に増大するを見る肉又は次第に其の大きさを増し肉底侵襲せらるゝに至れば肉底又著しく増殖す跛行は本症にありては病機蹄又の大部、蹄底及壁より露出せる時はじめて現はるゝを常とす而して著しき疼痛と跛行とを欠如するは本症の

診斷上必要なる徵候なり

療法 知覺部と分離したる患部の角質を除去し柔軟海綿塊は銳匙にて剝除し全蹄及露出肉壁を消毒し防腐、收斂、腐蝕劑を應用し蹄底には麻織糸塊にて適度平均の壓迫繃帶を施すべし

蹄又腐爛

原因 不潔を以て本症の素因となし馬匹を久しく厩舎内に繋留すれば必ず本症を發す又蹄の構造不良就中蹄踵の高きもの、窄蹄に頻發す

徵候 本症は蹄又中溝に起り是れより全蹄又に蔓延し其の崩壊作用は表層に止らず漸次深部に侵入し目を追ふて

全蹄又を侵蝕するに至る茲に至れば蹄又全く崩壊して肉又露出し跛行するに至る跛行は硬地よりも軟地に於て著し是れ軟地上にありては肉又は下壓を受くること大なればなり而して蹄又の腐蝕久しく持續するときは時として蹄壁の外面に於て固有の角輪を顯出す之れ診斷上尤も必要なることなり

療法 本症の尤も確實なる療法は清潔なり輕症は之れのみによりて常に治するに至る蹄又の清潔終れば防腐劑を施すべし防腐劑は蹄又溝に滴注し或は綿に浸して溝中に挿入す硫酸鐵或は硫酸銅、明礬、石炭酸、タンニン酸、硫酸亞鉛等を用ふ其他軟地上の運動を命じ蹄踵の高きものは可成的肢勢蹄形の許す限り低くし高き鐵蹄は同理により之れ

を除去すべし厩舎内には乾燥せる臥藁を多量に給し常に清潔ならしむべし

第九章 神經病

腦充血

原因 腦充血に積血及鬱血の二種あり

積血の原因は身体の大労働、過度の興奮及調教、腦の震盪、腦及腦膜の損傷、日射、夏日の大暑、濕蒸の厩舎、鼓脹、過食症等は皆之れを誘發し續發症として腦病、傳染病、中毒、寄生蟲等より來ることあり

鬱血の原因は頸靜脈の局處壓迫或は又調教の際過度に頭を擧下するに原因し心臟の瓣膜病、肺氣腫、肺硬變、胸水の場

合等に因る

徴候 實性腦充血の徴

興奮期、患畜は興奮不安となり譫妄發狂の狀を呈す結膜充血し瞳孔縮小し眼光瘳惡にして事物に驚愕し易く脈搏呼吸共に増加し体温又上昇す

沈鬱期、興奮期に次て發し來る即ち病獸は頭を俛れ飼槽其の他の物体に頭を掻し恰かも眠を催すものゝ如く痴鈍昏惰の狀を呈し瞳孔散大、通便遲滯するに至る
虚性腦充血の徴

沈鬱期に於ける症狀を呈し或は又腦貧血の徴を呈するなり

療法 病獸を安靜にし清涼暗黒の厩舎に入るべし

眞の興奮期にありては大に刺絡すべし大動物にありては二乃至二リートル半を瀉出し盛んに頭部を冷湯し冷水の灌腸を行ひ硫酸ナトリウム、硝酸カリウム、吐酒石、蘆薈の如き下劑を投ずべし甚だしき興奮には沈靜藥、催眠藥例へば抱水クロラール二五〇乃至五〇〇臭素加里二〇〇の内服を試むべし

腦貧血

原因 心衰弱、腫瘍、腦血管の血塞、栓塞、一般貧血等に原因し或は又頭部の血液急に他部に轉流するときに發す

徴候 急性症にありては眩暈を發し心力微弱となり脈搏細小となる重症にありては卒倒假死を來す此の假死は間

々真死に陥ることあり
療法 昏睡の状態にあるを以て興奮強心劑を投じ卒倒の場合には衝動劑を與ふ例へばエーテル一〇〇又は樟腦精一〇〇の皮下注射をなし又皮膚に刺戟藥(芥子泥)を塗布し
 アムモニア水、酒精、カフェイン等を用ふべし

腦卒中

原因 過度の勞働、大興奮、心臟作用の旺盛、日射病等に原因し或は又器械的暴力にもよることあり
徵候 患者は精神痴鈍となり眩暈を發し行步踉蹌として震顛し甚だしきに至りては失神頓仆し播擲を發して斃るゝに至る脈搏細弱、呼吸促迫し通便多くは遲滯し間々口腔

及鼻腔より出血を來す

療法 治療は概ね効なきも眞の初期にありては刺絡して多量の血液を瀉出して腦血行の流利を計り盛んに頭部を冷湯すべし既に腦貧血の徵を發せば興奮衝動藥を與ふべし例へば牛馬に樟腦一〇〇エーテル三〇〇を溶液となし五乃至六〇宛一日三回皮下注射し腦充血の徵あれば硫酸ナトリウム三〇〇硝酸カリウム二〇〇を與へ麻痺の徵あれば硝酸ストリキニーネ〇五蒸餾水五〇〇を溶液となし朝夕二回五〇乃至一〇〇宛皮下注射すべし

馬の腦膜炎

原因 素因、嘗て腦炎又は神乏症にかゝりたるもの并に其

の子孫は腦病に罹り易き素因を有す、誘因、過度の勞働、精神の大興奮、酷熱、外傷、腦の寄生蟲等は之れが誘因となり或は又生活法の急變及滋養濃厚の飼料は更に發病を促すなり

徵候 突然不安興奮し甚だしきは譫妄發狂の狀を呈し顔貌猙獰となり虚視して他物を射り或は妄りに前進し或は地上に顛倒して亂蹴し或は頭を厩壁に壓着して負傷するも更に顧みることなし体温は攝氏四十度乃至四十一度に昇り脈搏強實頻數呼吸亦疾速となる興奮期を過ぐれば愴鬱の狀を呈す即ち病獸は倦怠疲勞し頭を俛れて沈鬱の狀を呈し飼槽其の他の物体に撞し恰かも眠りを催すも、の如し食欲は輕症にありては稍々減ずるのみなるも重症にありては廢絶し通便秘澁す

療法 患者は清涼安靜にし廣き厩舎に入れ日光を遮ぎり自由運動を命ずべし初期には刺絡して二乃至三リートル半の血液を瀉出し冷水を頻りに灌腸し或は又抱水クロラール五〇〇アラビア護膜漿に溶解して灌腸を行ひ醫藥は内外共に消炎劑を用ふ即ち頭部を冷湯し硫酸ナトリウム三〇〇〇硝酸カリウム二〇〇〇を與へ或は又甘汞四乃至五〇〇を與ふ鎮痙藥として臭素カリウム一〇〇〇硫酸カリウム一二〇〇大黃丁幾二〇〇水一〇〇〇を一日二回に分服せしむ皮膚の誘導法として項又は頸の兩側に刺戟擦劑例へば巴豆油、芥子精、カンタリス軟膏、テレピン油等を塗擦すべし但し興奮期に於ては倍々興奮せしむるの虞れあるを以て之れを忌む

慢性腦水腫一名神乏症

原因 既往の急性又は次急性腦炎及遺傳等は其の素因となり酷暑及過度の勞働による反覆の腦充血、滋養過多の食等は之れが誘因となる

徴候 本病に罹れば意識の障礙を來し眼光魯鈍、頭を低れ或は又飼槽に頭を擡し奇異の姿勢を呈す身傍の事を顧みず或は又外來の感應を誤認し一邊に偏して暴進し事物に衝突す其の食を喫するや遅徐にして忽ちに咀嚼せず恰かも物の口中にあるを忘れたるが如く又水を飲むに當りて水面に就て飲まず頭を深く槽中に入れて飲む茲に至れば多くは知覺脱失し前額を指彈し或は腹側をつねり又は指

を耳中に挿入するも之れに感ぜざるに至るなり

療法 全治の望みなし故に攝生に注意し病勢の増進と腦充血及腦炎の合併を豫防するを肝要なりとす乃ち可及的使役の輕減を計り厩舎を清潔乾燥ならしめ力めて滋養濃厚の食を避け人工カル、ス泉鹽一五〇〇を與ふべし

日射病

原因 日射病は頭部に映射する日光の直達感作によりて發するものなり

徴候 前兆なくして頓發し体温昇騰せず腦炎、腦充血の徴を呈し不安興奮、狂躁、嘔吐を發す

療法 初期に於ては大に刺絡し二乃至二リートル半を瀉

出し頭部を盛んに冷湯すべし全身に冷水を灌腸し直腸には氷片又は冷水を注入す硫酸ナトリウム三〇〇〇甘汞四〇〇を頓服せしめ大興奮には鎮痙薬例へば臭素カリウム一〇〇乃至二〇〇を與へ或は又鹽酸モルヒネ〇・三を蒸餾水一〇〇に溶解して皮下注射し抱水クロラール二五〇を亞麻仁煎一〇〇〇〇に混じて灌腸すべし若し衰弱著しきときは樟腦一〇〇エーテル五〇〇の溶液を一回一〇〇宛皮下注射し或は安息香酸、珈琲涅五〇を皮下注射すべし

熱射病

原因 身体の過熱、過勞及体温放散の阻止に由て發す
療法 病獸は使役中大に疲勞し發汗淋漓、呼吸促迫し大に

苦悶の狀を呈す心悸亢盛、脈搏細數となり瞳孔は當初散大し後には縮小となる遂に踰踉として地上に臥れ失神震顫播擲を發して斃るゝに至る療法は前症に同じ

腦脊髄膜炎 項痙一名ボルナ病

原因 本原は傳染なるも傳染毒の本態は未詳なり
徴候 輕症は食思不振、結膜充血し步履蹣跚となる重症にありては食慾廢絶し結膜は暗赤色となり鼻粘膜は著しく充血す脈は軟實疾速となり体温は攝氏三十八度乃至三十九度に至り呼吸は稍々増加す頭蓋は大に熱を帯び精神痴鈍なるも皮膚の知覺過敏にして反射刺戟亢進し物に驚愕し易し又身體諸部の筋肉播動し頸は強拘にして反張又は

側頸するものあり興奮不安、發狂の狀を呈し通便多くは秘結し腸の蠕動微弱なり
療法 豫防法として厩舎を清潔、消毒し健馬を離隔すべし療法は未だ確實の方法なし唯だ對症療法を施すに過ぎず

第十章 體質病

貧血病

原因 種々あるも多くは先天性にして一時の大出血若くは反覆の亡血或は又營養の不給は貧血病の重なる原因となり而して許多の急性病、慢性病及勞働過度は續發貧血を來すなり

徴候 皮膚并に露出粘膜は蒼白色を帯び病獸は倦怠虛弱

にして疲勞し易く輕役に服せしむるも忽ち心悸亢進し呼吸疾速、脈搏細小となる食慾不振、消化不良を來し遂に惡液質に陥りて斃る

療法 患者には力めて滋養易化の食を給し管理に注意し醫藥としては鐵劑、砒石劑、苦味藥を處すべし即ち牛馬には鐵粉又は硫酸鐵二乃至三〇を食鹽に伍して與へ或は亞砒酸一〇〇クロールナトリウム、杜松子末各一五〇〇を散劑となし一日二回一食匙宛飼料に混し與ふ犬に林檎鐵丁幾五〇蒸餾水二五〇〇を日々二回一茶匙宛與ふべし

惡性貧血

原因 本症は傳染若くは中毒に原因するものゝ如きも其

の本原は未だ明かならざるなり
徴候 本病は倦怠衰弱の徴を以て發し來り或は突然高熱を發して起り脈搏疾速、心音不純にして雜音を呈し倦怠疲勞に加はり終に瘦削して斃る
療法 病畜には滋養過多の食を給し鐵粉二・〇乃至五・〇を食鹽又は芳香苦味藥に伍して與ふべし

羊の水血病

原因 營養不給即ち泥沼地若くは砂地の牧場、粗惡變敗の飼料、不當の管理、天候不順、連日の霖雨、濕潤の牧場、飢饉等は本病の重なる原因となり續發性水血病は慢性消化器病、肝蛭、蟲等より來る

徴候 患者は食慾欠損、倦怠疲勞を來し行步踳踉として漸々瘦削に傾き皮膚及諸粘膜は蒼白色となり心悸亢進し脈搏呼吸共に増多し末期に至れば四肢に浮腫を發し下痢衰憊して斃るゝに至る
療法 可及的穀類及良乾草を與へて營養を改良し鐵劑、石灰鹽類、芳香、苦味藥等を投ずべし

牛の水血病

原因 日常水分過多の食を喫するより來る
徴候 病初倦怠疲勞し食慾佳良なるにも係らず毛皮粗剛となり營養不良に陥る末期に至れば消化不良となり交々便秘と下痢とを發し水様の尿多量を排泄す四肢に浮腫を

來し歩行困難となる
療法 原因の除去を必要とす即ち不良の飼料を廢し乾草飼料を與ふべし醫藥は對症療法として利尿劑、下劑を投ずべし

失苟兒陪屈

原因 眞因は未だ審ならず營養不良、幽舎の濕潤、換氣不良、運動不足等は素因となる
徵候 倦怠疲勞、食思欠損、齒齦紫色を呈し齒は脱落し易くなり皮膚に藍赤色の血斑を生じ後に至れば潰瘍に變ず
療法 先づ病畜は乾燥にして溫暖なる舎に移し良食を給し苦味收斂藥を處すべし

第十一章 皮膚病

紅斑又紅斑性皮膚炎

原因 器械的作用、化學的刺戟及冷熱の感作による
徵候 大小不同の赤色斑點を以て唯一の表徵となす
療法 原因を除去し亞鉛華と澱粉(一、三)酸化亞鉛軟膏一、一〇)を塗布し烈しき痒癢あるときは硝酸銀溶液(六%)又はザリチール酸軟膏を塗布すべし

濕疹

原因 外因は器械的、化學的、溫熱、傳染毒の如き外來刺戟による内因は食物の發疹、水銀、沃度、鉛の中毒、體質病、腸内分解

産物の自家中毒

徴候 濕疹は大概次の六期を以て顯はる

第一、紅斑期、皮膚は充血し皮膚の表層に滲出あり

第二、小結節期、許多の小疹を發し、皮膚の乳嘴体に小細胞及

漿液を浸潤す

第三、水疱期、水疱は前述の期に次で發し又病初より發す

第四、滋潤期、水疱自ら破潰すれば滋潤面を顯はす

第五、膿疱期、最初より膿疱を發し或は水疱は膿疱に變ず

第六、結痂期、水疱膿疱の含液又は滋潤面の滲出物乾燥して

痂皮を結ぶ

療法 第一に原因を除去し清潔消毒を行ふべし

局所療法は皮膚の感覺、箇体の特異性動物の種類等により

て異れども急性濕疹には緩和包攝劑(種々の散布藥、油劑及軟膏)を用ゐる慢性症に對しては刺戟藥(木タール、硝酸銀、硫肝)を用ゐる甚だしきは腐蝕藥を用ふるにあり何れの場合に於ても施藥前には鱗片痂皮は軟化又は除去するを要す

水疵、膝輝、飛輝

原因 塵埃、泥土、寒氣等の刺戟に原因す殊に雨後、融雪後の泥濘は之れを誘發するものなり

徴候 紅斑期にありては患部の皮膚は潮紅腫起し熱痛を帯び水腫期にありては紅腫の皮膚に水疱を發し滋潤期に至れば水疱破潰し淡黄無臭の水様液を漏らす水疱は屢々膿疱に變ずることあり是れ即ち膿疱期なり此の期の癒ゆ